

食を通して地域を支える。
食を通して未来に関わる。

東日本大震災復興支援事業
ラオス・浦上ランチプロジェクト

活動報告





食を通して地域を支える。食を通して未来に関わる。

東日本大震災復興支援事業／ラオス・浦上ランチプロジェクト 活動報告

ごあいさつ

公益財団法人 浦上食品・食文化振興財団
理事長

浦上 節子



皆さまの大きなお力をいただき、公益財団法人浦上食品・食文化振興財団も設立 30周年を迎えることができました。心より厚くお礼申し上げます。

20周年からの10年間はいろいろなことがありました。2011年3月11日の東日本大震災は未曾有の大災害になり“想定外”という言葉がよく使われるようになりました。

私ども浦上財団でも2012年度から東日本大震災復興支援事業を立ち上げ、直接支援活動に携わっていくようにしました。支援金贈呈式も被災地に近い仙台にて行いました。皆さんのお話を伺い、被災地を案内していただき、厳しい現実言葉に言葉を失いました。地道な支援を継続して行くことを肝に銘じました。

同じ2012年にラオスでの浦上ランチプロジェクトを開始しました。2014年には実施している学校でセミナーが開催され、ビエンチャンの教育省幹部のヤンシア＝リー女史も参加されました。国営テレビもこの浦上ランチプロジェクト取材し、15分番組として2015年の7、8月に4回にわたりラオス国内で放送されました。

私が最初にラオスを訪れた時は、タイから20分ほどメコン川を渡し舟で渡ってラオスに入学しましたが、今では日本からのODAでの橋が完成し、車で出入国できるようになりました。こうして浦上ランチプロジェクトを実施している学校が当初のプログラムどおりに私どもの支援なしに自立し、モデルスクールとなって学校給食がラオス全土に普及されるように私たちも腹をくくらねばと強く思っています。

20周年の韓国との食文化交流展を京都の二条城で開催した折、次の30周年はアジアに向かって活動を広げたいなあと心に思いました。その願いが叶いラオスでの浦上財団ラオス学校給食普及事業（通称、浦上ランチプロジェクト）になりました。

幸いなことに、私はいつも財団のシンボルマーク“食”のように“良”き“人”に出会い、道が開けます。出会いのあった多くの方々に心より感謝しています。本当にありがとうございます。

今後とも温かいご声援をよろしくお願い申し上げます、ご挨拶とさせていただきます。

c o n t e n t s

30周年記念対談
浦上節子理事長×浦上聖子評議員…………… 4

東日本大震災復興支援事業報告…………… 17

ラオス・浦上ランチプロジェクト活動報告…………… 39



浦上
理事長
節子

対
談

浦上
評議員
聖子

浦上節子理事長 浦上食品・食文化振興財団にとって、国外に出た継続的な活動としての「ラオス・浦上ランチプロジェクト」は大きな意義がありました。

そもそも、2005年の財団設立20周年の時が日韓国交正常化40周年にあたっていて、日韓友情年2005の記念事業の一環として、京都の二条城で開かれた「日韓食文化交流展」に協賛したんです。それがきっかけで、日本国内から韓国との交流ということで視野が広がりました。その時、ああ、次はアジアに向かっていきたいなっていう思いを持ったことを覚えています。

それがひょんなことから、私が、教育支援を通じた国際協力NGOである公益財団法人国際センター(EDF-JAPAN)の理事をすることになり、タイとラオスを視察する旅行に同行して。EDFタイの活動を視察させていただいたのですが、その時にラオスの方にも行きました。まだメコン川を渡る橋ができていなくて、イミグレーションは本当に掘って小屋みたいところでした。川面への階段を下りていったらそこでタイ出国となる。そして舟に20分乗って、反対の岸に着いたら、また掘って小屋で今度はラオス入国の手続きをする。メコン川を20分渡るだけで、お互いにそこに見えるのに、タイとラオスでは生活水準も文化度もまったく違っていました。ラオスの子どもたちの目はとっても輝いていて、生活は貧しいけれども清らかな目と礼儀正しさを持っているなどとても感動したんです。ああ、戦後の日本もこんなふうだった。アメリカからきた脱脂粉乳の学校給食が始まって、だんだん日本の子どもたちも体格が良くなり、今の日本の繁栄を築く子どもたちができてきたんだなあ。だったら、こういうところこそ、食の財団であり食文化の財団でもあるのだから、戦後の日本のような学校給食をしたらどうなのだろうと思ったのがきっかけでした。

そもそものご縁は、国際センターの理事長をしていらっしゃる秋尾晃正さんのお兄さまと私が美味しいものを食べる会の仲間で、たまたま、理事になってもらえないかと声をかけていただいて。国際センターではラオスに小学校校舎を建てていますが、その設計をした建築家の加藤隆久さんも同じ美味しいものを食べる会で一緒だったんです。理事に就任させていただいたすぐあとにタイ、ラオスの視察旅行があり、それで同行させていただいたんですね。

タイでの活動はとてうまくいっていて、私たちがラオスでささやかに始めたランチプロジェクトもタイのような成功事例を目標にしていきたいと思っているんですけど、今はまだ始まったばかり、難題がいっぱいです。

浦上聖子評議員 ラオスがタイと違うのは、気候がすごく大きな課題となっていることですね。ラオスでは乾期のときには作物もみんな駄目になってしまう。その難しさがあります。給食を根付かせるためには、作物を育てることも教えなくてはいけなわけですからね。人の心というか、考え方の根本が問題ということもあります。自分のところだけ食べられればいいとか、自分の子だけ食べられればいいっていう、まだまだそんな意識が強いので、その意識を変えていかないといけないです。まあ、タイは豊かですからね。豊かなところでは他の人のことを考える余裕もあるけれ



給食によって勉強するようになり
学力も上がる。
食はすべてにリンクしている。

ど、ラオスはまだまだ。この前（2015年2月）行って、つくづくそう思いました。貧しいという言い方が適切かどうかわかりませんが、まだまだ自分のことで精一杯。給食をやるようになって、みんなが一丸となってやるには課題が山積み。根本の意識を変えるというところから始めないとダメなのかなということをすごく感じました。

価値を理解してもらうこと。継続のための根っこづくり。

浦上節子理事長 このランチプロジェクトは民際センターへの委託事業。だから今の3つの学校を選ぶのにも民際センターの人たちは現地の村長さん、校長先生、それから婦人同盟の人たちにそれぞれがどれだけ協力できるかアンケートをとってやりましたよね。それも字が読めない人が多いからみんな自宅に行ってヒアリングして、アンケートをとって、3校選んでいたんですけどもね。今回再度訪問して、ひとつの村のボンサイ小学校はまとまっていたけど、4つの村から成り立っているハドシェンジー小・中学校は意識が統一されていない感じでまだまだだなと思いました。リーダーがいるところはリーダーがしっかり統率するからみんなの心がひとつになっていたけれど、いろんな村が集まっているところは、統率が難しくてなかなかうまくまとまらない。そもそもハドシェンジーは小学校と中学校が同じ敷地内にあって4つの村から集まってくるから、4つの村の村長さん、それに小学校と中学校のそれぞれの校長先生もいて、命令を下す線がいくつもあるのよね。だからひとつにまとまるのもなかなか。

浦上聖子評議員 それに、ハドシェンジーは水が豊かですよ。水が豊かで土地も作物の種類もあって、何かを育てるっていうこともできるのにうまくいっていない。それに比べて、ボンサイはずっと貧しかったじゃないですか、水もないし。水がなくなっても、自分の家の井戸を使ってくださいってという村人の申し出があるって言っていましたよね。ボンサイの人たちの方が持てるものはすごく少ないのに、心はひとつになっている。だから成功しているんですよ。

食べるものがない時は、どこかの家が鶏を1羽提供するとか。あの生活のなかで鶏を1羽提供するってすごいことだと思うんです。そういうことをちゃんとやれるということは、給食の価値を理解しているということですよ。給食そのものの価値を理解してもらうことはすごく大変なことです。というか、それを理解してもらえば、みんなの協力も得られるということなんじゃないかな。

浦上節子理事長 そうそう。一番お年寄りのおばあちゃんが毎日学校に来てくださっていて、子どもたちと同じように草取りしたり、給食の準備をしたり。それから中年の男性もボンサイ小学校にはいらしたわね。あの人がすごく大きな要になっていると思いました。

ランチプロジェクトが始まるまでは、お昼はみんな家に帰って食べていたって言うていたでしょ。それで、貧しい家の子は家に帰ったら家の手伝いで忙しいから、午後からは学校に来なかったり。それが給食が始まってからは家に帰る必要がなくなったから、午後の授業も受けられるようになったって。給食はおかずだけだから、子どもたちはご飯を家から持ってくるわけだけど、貧しくて持ってこれない子には持っている子が分けてあげるように先生方が指導してね。

給食によって、勉強もちゃんとするようになるし、勉強をするようになれば子どもたちの学力や知識力も高まる。ひいては国力が上がるということにつながる素晴らしいですね。そう考えると、食べるということはすべてのことにリンクしてくる。

栄養バランスもちゃんと考えていて、私たちが見学したときは、野菜とかお肉とか魚とかを一緒にスープにして、ご飯と一緒に食べていたじゃない。病気が減ってきたらいいし、体格もよくなっているようだし。やっぱり、財団のシンボルマークの「食は人によいこと、元気のもと」、給食はそれを実証するものだったなあと感じました。

前回ボンサイ小学校に行った時はセミナーで行ったのだけど、ちょうど深刻な水不足で。浦上財団になんとかしてくれないかっていうお話が出たの。そのとき、私は日本の戦国時代には「水を治める大名が国を治める」と言われていたという話をしたのね。やっぱり治水はすべて関わる大きな問題だと。そういう話をしたら、そのあと、ボンサイ小学校はすぐに池を作った。ああ、私がああ発言をただけで、村人たちは自分たちの力で池を作った。そういう熱意が、給食への取り組みの真剣さにも表れていると感じたわ。

浦上聖子評議員 ボンサイ小学校は本当にうまくいっているから、浦上財団の支援がなくなっても給食をなんとか自分たちで続けようとする、そういう力があると思う

んです。やっぱり給食そのものの価値がわからなければ、私たちの支援が離れたときにそこで終わってしまう。それだと意味がない。

資金的なこと、物質的なことというよりも、私は村民の人たちに給食しているいろんな面で本当に大切なんだということを、子どもたちはもちろん地域の人や親や父兄、みんなにわかってもらえば、みんなで協力してなんとか続けようとする。そういうふうに関心を動かすということが、このプロジェクトの成功につながるのだろうなと痛感しました。

このランチプロジェクトもそうですけれど、いろんなNPOの方とかが発展途上国に関わっていらっしゃるんですけど、そういう方々の本とかを読むと、やっぱり早くに結果を出すことが必ずしも成功ではないのだと思いますね。

浦上節子理事長 問題は、根っこを作れるかどうかということね。

このプロジェクトが始まったとき、委託している民際センターの秋尾理事長は3年でひと区切り。1年目は週1回の実施、2年目は週3回、3年目は週5回実施。それでプロジェクト完了、卒業って言うていらした。でもそれを聞いた時、私は3年ではとても無理でしょうと思ったのね。秋尾理事長はその信念でやっていらして、ポンサイ小学校は成功例ということになりましたけれど、やっぱり学校の選び方にもよるわよね。

私はいつも「継続こそが力なり」と言っているのだけれど、どのプロジェクトもそうでしょう。だから、3年で卒業というのはどうなのかなと思ったのだけれど。

浦上聖子評議員 そこが一番難しいところかもしれませんね。いつまでも支援があるとと思われる、甘え…甘えちゃうって言い方はちょっと語弊があるのかもしれないけど、支援に頼ってしまうところが出てくる。ある程度目処がついたところで支援する側は手放して、あとは現地の人たちが自分たちの力でやることを促す。そのために秋尾理事長は3年であっさりおっしゃったのかもしれませんがね。そのところは現地でやっている方でないとわからないところがありますから。

今はある程度、意識の高い学校や地域を選んでいるわけですからね。ただ、これを本当にラオス全土に少しずつでも拡げていこうとしたら、選んではいられなくなりますから。だから何が一番大切かということ念頭においてこのプロジェクトを進めていかなければいけないなと思いました。すぐには結果が出なくても、長く続けられるような体制を整えるということが結局は根づくことになる。

私もラオスに行かせてもらって、本当に日本で東京の環境で考えていることと、あちらの現地の人の実情というのはすごく差がある。ものの考え方にしても状況にしてもまったく違うと痛感しました。だから実際に担当しているEDFラオのカムヒアンさんという方が、「この給食プロジェクトもそうだけど、すべての支援を実行するときに、自分はプロテクト・バランス・プロモーションということをすごく大事にしている」とおっしゃっていたことがとても心に残っています。

プロテクトというのは現地の人々の生活を守ること。守りながら、そして守りつつも新しいこととのバランスを見ながら、新しいものを促進していく。プロテクトとバ

ランス、このふたつが本当に大事で、いきなりプロモーションはできないのだということをおっしゃっていたのが、私にはとっても印象的でした。プロジェクトは、実際に現地に入って活動している方を尊重しながら推進していくことが大事なんだなあと。

浦上節子理事長 EDFラオの一番トップのカムヒアンさんがそんなことを言うていらしたのって素晴らしいことと思うわ。

このプロジェクトは浦上財団としては民際センターに委託しているわけだから、民際センターの長年の実績を信頼してお任せしなくてはね。ただ、実際に現状がどうなっているかはしっかり把握して、こちらからも希望をお伝えしていかなくてはいけない。委託して報告書もらえばいいではなく、いつも財団はプロジェクトの成り行きに深い関心を持っている、気にかけているということを伝えることで違ってくるのかなと思います。その意味でも、時々現地を訪れるということはすごく大事だと思います。実際に子どもたちの顔を見れば、この子たちのために何かしてあげたいっていう私たちの思いも新たに生まれますから。

一緒にご飯を食べたり、菜園で草取りをしたりね。給食も一緒に食べたけど、美味しかったわね。あちはナンプラーがあるからかな、すごくお出汁、スープの味がよかった。まあ、うま味調味料はたくさん使っていましたけれど(笑)。子どもたちが持ってくるご飯の量はすごく多かったわね。

「支援の基本は
プロテクト・バランス・プロモーション
とは現地責任者の言葉。」





支援の成否は、その地に活動の根っこを
作れるかどうかにかかっている。

浦上聖子評議員 餅米でね。自分たちが育ててるから、きつとご飯はあるんでしょ
うね。みんなでなかよく食べることで、いろいろ分けあうことも学んで、片づけるこ
とも学んで。食事のあとには歯磨きをするということも学んで。ボンサイ小学校で、
あのおじさんが生徒ひとりひとりに手洗いから、給食を受け取るときにはちゃんと感
謝の礼をするようにということまで言っていた、あの光景は美しかった。食べ物に感
謝する心をちゃんと教えているのは素晴らしいですね。

それに、みんなの笑顔がいい、素敵で可愛い。子どもから手伝ってくれている
おばさんたちの顔から、おじさんの顔から、みんな。あの顔を見てたら、貧しいのか
なんなのか、ちょっとわからなくなりますよね。何をもって貧しいというのか、わから
なくなるような体験でした。

浦上節子理事長 本当にそうね。ハドシェンジーが今ひとつまとまりがないというこ
とに関しては、この前、東日本大震災復興支援で財団ともご縁のある立花貴さん（公
益社団法人 sweet treat311 代表理事）に何かまとめる方法はないですかって訊いて
みたの。東北には被災した浜がたくさんあるでしょ。それぞれ、浜ごとに違う集落
だったわけだけど、立花さんたちはそれをひとつにまとめるために学校で運動会をし
たというのね。運動会でみんながひとつになってすごく団結ができたんですって。

そういう何かイベントを企画すればいかがですかってアドバイスをもらっただけ
ど、さてさて、ラオスのあそこで運動会っていうのはどうかしらねえ…みんなでドッジ
ボール大会をすとか、リレー大会をすとかね。何かそういうことを提案してもい
いかなあ、なんて。まとまるための何か。みんなの気持ちがひとつになること。そ
れがハドシェンジーには必要だと思ったわ。

浦上聖子評議員 確かにそれもそう。でも一方でやっぱり、給食を続けていくため
のリーダーが要りますよね。誰かひとり、統率してくれる人。給食を作っているお母
さんも来たり来なかったりだから、ある程度日割り当番を決めるとか、何かしないと。
それに、ハドシェンジーはボンサイに比べて、環境的にも恵まれているから、ご飯を食
べられないとか栄養が少ないという家はきつと少ないのでしょうかね。学校で食べな
くても家で食べられるから、結果、親の協力も少ないのかなと思ったりもしました。

だから次に選出してくださる学校は、EDFラオの方針もあるでしょうけれど、より
給食が子どもたちの一食として重要な地域の学校を選出してほしい。その方が協力
も得られやすいですし、そういうところで成功すれば、給食がどういうものか理解
され、拡がっていくのではないかと。地域の経済状況というの、ランチプロジェクト
が成功する成功しないに大いに関係あるのかなと思います。

浦上節子理事長 そうねえ。秋尾理事長は、次は実際に支援を受けたいと思っ
ている学校が自ら手を挙げて、そのなかから選びたいっておっしゃっていたけれどね。
ハドシェンジーはもう1年継続するから、ボンサイ小学校の分ね、ボンサイが支援対
象を卒業するからその分、新たに1校を選ぶわけだけど。財団の研究助成みたいに
自主的に申請してもらって、それで選びたいって。

ビエンチャンからセミナーでいらしていた方も、物をボンと寄付してくれるところは
多いんだけど、給食をはじめるとか、なにかをちゃんとするというところはなかなか
ないとおっしゃっていました。

浦上聖子評議員 東北もそうだし、ランチプロジェクトも同じ。支援の基本って、そ
の地に根づいてその人たちが頑張って自分たちの力で続けようとする。それが
支援する、お手伝いするという基本なんだと思うんです。だから支援期間内で
終わってしまうようなことにはしたくない。財団としての支援は、ラオスの場合もそう
だし、東北の場合もそうだし、これからやる何かでも、私たちが支援することでそこに
根づいて、それを続けてもらうことを目標にしていくべきではないのかなと思います。

浦上節子理事長 それは浦上財団のすべての活動分野に通じることよね。研究助
成にしても、若い先生とか地方にいらっしゃる先生とか女性とかいろいろ、普通は支
援を受けにくい条件の人に助成して、それも少額をたくさんの人に助成するのではな
く、形になるようにまとまった金額にするというのが財団のやり方。これは、財団の

すべての活動の基本姿勢。だから本当に自立、それを一番大事にする。それで支援は継続が基本。期間が終わったらポンとやめるんじゃなく、それがきちっと続いていくようにしていく。ラオスでも、継続していくことで給食の価値が理解されて、ラオス全土に広がっていく一歩になればいい。その意味で、ラオス国営テレビが私たちに関心を持ってくれて15分番組を作ってくれたということは嬉しかったわね。

浦上聖子評議員 今までは、それこそ給食っていう概念がラオスの人にはなかったんでしょから。こういうものがあるっていうことを、ラオスの人に知ってもらい、関心を持ってもらうために、あのテレビ放映はすごくよかったですよね。給食がどんなものかとか、こういうシステムがあるってことを知って興味を持ってもらう。だからまずその給食ってことへの啓蒙からしていかないと。あのテレビ放映は本当にいいチャンスでしたね。

東日本大震災復興支援に取り組む

浦上聖子評議員 そもそも、震災直後に物資が必要ということで物を送ることをまず個人的に始めたんです。最初はダウンウェア、次はタオル。ひとつのものに決まないと送られたほうも分別する手間が大変だと聞きましたから。東北の3月はまだ寒いので、まずはダウンと決めて、家にあるものを整理して、友人や知り合いにも声をかけて出してもらった。理事長にも協力してもらいましたね。それで、荷物がまとまったら、一番早く運べる手段がなにかもちゃんと調べて送る。あのときは交通も遮断されているところだらけだったので、鉄道もない、車も入れないという状態で。横浜のエアフォースベースから飛行機で送ってもらったこともありました。

その頃、東北各地の炊き出しを個人で支援している立花貴さんと知り合ったんです。今、公益社団法人sweet treat 311の代表理事として、浦上財団とも深いご縁になりましたけれど。立花さんの活動のひとつが石巻市雄勝町の中学校でした。

私が初めて現地に行ったのは、6月頃でした。自分の子と同じくらいの子どもたちがこんな思いをしているんだと思ったら、何かできることをやらなきゃって、居ても立っても居られない気持ちでした。給食センターが津波で流されてしまったので、給食が再開されたあともパンと牛乳だけという状態だったそうです。避難所でも、朝食はパン1個かおにぎり1個。これでは子どもたちの身体がもたない、なんとかしたい。なんとかしなくちゃということで立花さんたちは孤軍奮闘されていた。それで、給食作りをお手伝いすることから始めたんです。その方の活動を見て、それをお手伝いするうち、浦上財団でも何かできるんじゃないかと思うようになっていきました。

浦上節子理事長 聖子さんから提案があって、浦上財団として最初に支援したのは、平成24年(2012年)年度。震災があった平成23年(2011年)3月11日には、23年度予算はすでに理事会承認されたあとで間に合わなかったのよね。だから、翌年から、東北支援は聖子さんを選考委員長にして始めた。

相手の状況や気持ちを理解し、
そのために役立つことを考えていきたい。



浦上聖子評議員 農業も漁業もすべて破壊されてしまっていましたから、たとえば、ホヤだったら3年経たないとできない、カキでも何年経たないとできない。全部、流れてしまったわけで、そういうものの復興からしていかなきゃいけない。やっぱり浦上財団は食の財団なのだから、食を復興させるために何かできることがあるんじゃないか。財団で支援したらどうだろうかと提案をしたんです。

それでも、震災直後と今では状況も支援に求められる内容もすごく変わってきています。一番最初は食べることがなにより大事でしたが、何年も経てば、それなりにみんな仕事もできてきて、仮設とはいえ住むところもどうにか落ち着いてきた。そうになると、直接的な食べることの支援はもう、あまり必要ないのかもしれない。漁業とか農業とか産業自体がなくなってしまったので、たとえば水産加工場が流れたことで働き場所を失うとか、二次的な問題が大きい。それを解決するためにも、漁業や農業の支援をすることでそこにまた雇用も生まれて…ということになってきている。

もうひとつ大きな問題なのが、震災直後には本当にいろいろな支援がありましたが、今でも継続しているところとなると本当に少ないことですよね。

浦上節子理事長 ここでも問題はやっぱり、継続ね。浦上財団でも、放射能汚染に取り組んでいらっしゃる半杭一成さん(NPO法人 懸の森みどりファーム代表)や立

花貴さん(公益社団法人 sweet treat311代表理事)たちに継続して支援をしています。半杭さんに初めて話をお聞きしたときは、みんなもらい泣きしてしまったものね。飼っていた乳牛を放棄して慌ただしく避難しなくてはいけなかったという…。

浦上聖子評議員 福島は震災に加えて、さらに継続的な問題を抱えていますものね。津波で流されてしまったところは、これからも大変な苦労があるだろうけれど、でも時間はかかってもいつか復興できる。でも、福島は放射能汚染というイメージを払拭するのがなかなか難しい。農産物や畜産品もみんな大丈夫、汚染はまったくないといわれても、風評被害はそう簡単には消えないかもしれない。だから、一概に震災支援といっても、岩手とか仙台が抱えている問題と、福島の原発被害のところが抱えている問題は、やっぱりすごく違うわけです。

もうひとつ、ここ最近の震災復興支援に応募されている方々を見てみると、復興にとどまらず、村おこし的なことに着眼して、もっとここに人を集めよう、これを発信源として東北に人を集めようっていう意識の方が増えてきたように思います。復旧から復興、そしてもう一段階進んだ活動にだんだん変わってきている。そういうことで、その地域がまた活性化する。震災が起こったことはすごく不幸で大変なことだったけれども、それをきっかけとして、そこから新しいことを生み出していこうとしている。たとえば、岩手県宮古地域の文化や文化資源を活かした地域づくりと観光客誘致活動に支援を求めた「ほっこり宮古実行委員会」もそうですし、「sweet treat311」もそうですね。今後は直接的な復旧復興のためのニーズは少なくなってくると思います。

復興をふまえてもう一歩先に何かを生み出していらっしゃる方とか、あとは、まだ個人の考えですけど、継続的に何かをなさっているところとは別に、イベント的に単発で何かなさるようなところに対して支援してもいいのかなという気もしています。

浦上節子理事長 浦上財団の活動をもっと知ってもらいたい。それで、いい活動をしている人、しようとしている人たちを支援していきたい。財団の事務局によると、岩手県の方からの応募が少ないらしいのね。それで、いろいろなところの支援申請が集中している時期をはずして募集することにしたのだけれど。

町長さんはやる気旺盛でまた昔のようにしようと張り切っているけど、避難した町民が避難したところで新しい生活を築いていて、戻って来る人が予想以上に少ない。そういう町の話も聞きましたよね。コンビニとか日常生活に必要な施設ができないことには帰れませんものね。なかなか元通りにはならないわね。

浦上聖子評議員 東京で生活していると、震災があったという事実だけが残って、どこか実感が薄れちゃうんですね。でも現地の人たちは、今でも一生懸命がんばっていらっしゃる。そのことに変わらない。そのことを忘れずに、その人たちの時々のニーズというか、その時々求められることをちゃんと把握しながら、長い目で活動していけたらなって思っています。



今、私は別の団体で震災で親を亡くした遺児孤児をサポートする活動もしているんですが、個人と財団の活動はそれぞれ違う役割で、私のなかでは相互作用があると思っています。個人で活動することは、当然のことながら、出会いのあったところに限られる。でも、財団の活動は広域のいろいろな方々に、私たちはこういう活動をしていますからこういう支援ができますということを知ってもらうことができます。

浦上節子理事長 そうね。財団は「食」を柱にした支援活動だし、一方は「親を亡くした子どもたち」への支援だしね。あなたはいろいろな面で東北に関わっているから、思い入れも深いわよね。

聖子さんの活動は聖子さん自身が人脈をいろいろ幅広く持っているから成り立っている。友だちからずっと拡がって行って、現地の、本当に普通の人や子どもたちにつながったボランティアをしている。私の活動は研究助成から始まったので、北海道から沖縄までの各大学の先生方の研究助成を、特に助成が取りづらい先生方に光をあてたいっていう思いでやってきた。それで、人のつながりがつながりを作っていく。

うちの財団は支援金の使途についてあんまり制限しないで自由に使っていただけるからすごくありがたいって先生方からは感謝されてるみたいです。私がいきなり専業主婦から理事長になったわけですから、最初にどのように運営すべきかお訊きしたとき、「少額をたくさん配るよりも、300万円くらいのまとまったお金を助成すればいいよ」

と助言された。この30周年でも、1,000万円とかの記念大賞を贈呈するよりも、研究室を立ち上げる時の先生方が一番大変なことから、そこにスポットをあてたらどうかとアドバイスされて、研究室を立ち上げた4人の先生に助成することにしたんです。

浦上聖子評議員 相手の立場になって考えるということは一番大事なことですよね。研究助成も、先生方の実になることを考える。ラオスも現地の人の身になって考えてくれる人、実際にわかっている人に、助言をもらいながら進めていく。東北もそうですね。その人たちの生活というものがあるし、それを守りながら、できることを手伝っていくという姿勢を崩さないようにしないと。やっぱり、支援って、財団も私の子どもたちへの支援もそうですけれど、やってあげる的な姿勢では絶対にダメですね。その人たちの身になって活動するという姿勢を崩さなければ、手伝えることも次々とみつかるのかなと思います。

浦上財団のこれからは…

浦上聖子評議員 研究助成という部分ではある程度確立したものをもちつつ、また広がっていくと思います。一方で、今いろんな支援に取り組んでいますが、もっと世界に目を向けて、いろんな活動ができたらいいなかなと思っています。この頃、アジアの一員であるということを感じる機会がとて多いので、アジアの中で日本人からできること、自分たちの役割を果たしたいといった夢を持っています。そのために、自分もいろいろなところにアンテナを張り巡らしたり、いろんな情報ももらったり、いろんな勉強をして、何が求められているのかということ自分なりに発掘していくことが大事なんだろうかなと思っています。

浦上節子理事長 今回30周年記念事業のひとつとして「トラベルアワード」という、横浜で行われているアジア栄養学会議に出席する、アジアの貧しい国の研究者に旅行資金とか滞在費を支援したんです。30万円を20件。それも評議員の加藤久典先生から、30周年でこういうことをしたらどうかとアドバイスを受けて。アジアの12カ国の40歳以下の若い研究者たち231人が応募してきて、そのうちの20人に支援しました。開会式の一番最後、ひとりひとりに私が「コングラチュレーション！」って握手しながら渡したんです。受け取る人は口々に「アジアの栄養学会議というすばらしい国際会議に参加できて自分は本当によかった」って言うの。こういうことこそが、本当に日本にできることじゃないかなって思いました。「トラベルアワード」のときに、会場にこれまで財団が助成した先生方が何人もいらしたの。「理事長、あの節はありがとうございます」とその人たちから声かけられて。あの人もあの人も、こうやって活躍する先生方に助成金を出しているんだなって、財団がこれまでしてきたことの評価なんだって思いました。これからも、そういうことを積み重ねていかないといけない、そうして、食というシンボルマークを広く伝えて活動を広げていきたいなと改めて思いました。

● 東日本大震災復興支援事業報告 ●

東日本大震災復興支援事業

2011年(平成23年)3月11日(金)14時46分18秒、宮城県牡鹿半島の東南東沖130km、仙台市の東方沖70kmの太平洋の海底を震源とする地震が発生した。地震の規模は、マグニチュード9.0。日本周辺における観測史上最大の地震だった。この地震によって巨大な津波が発生し、壊滅的な被害をもたらす。2015年11月時点で、震災による死者・行方不明者は18,460人、建築物の全壊・半壊は合わせて399,617戸とされている。さらに、地震から約1時間後には、津波をうけた東京電力福島第一原子力発電所が全電源を喪失。大量の放射性物質の漏洩を伴う重大な原子力事故に至る。同原発周辺一帯の福島県住民の避難は長期化し、風評被害や人体の健康に関する論議、市民活動や経済への影響など、広範かつ深刻な影響を引き起こした。



大槌町旧庁舎。2015年9月撮影。

4つの現場の今



浦上食品・食文化振興財団では、地震発生時には4月からの平成23年度活動計画がすでに決定しており、震災発生直後にWFP、公益法人協会の救援基金に50万円ずつ総額100万円を寄付するなどの対応はしたものの、財団としての支援活動は翌年に見送らざるを得なかった。

2012年(平成24年度)、岩手・宮城・福島の被災地三県で、農業などの一次産業や飲食・加工業に関わるNPO等諸団体の支援を旨とする助成がスタートした。

平成24年度(初年度)支援対象は3件(宮城県2件、福島県1件)、平成25年度は6件(岩手県1件、宮城県2件、福島県3件)、平成26年度は6件(岩手県1件、宮城県2件、福島県3件)、平成27年度は6件(岩手県2件、宮城県2件、福島県2件)である。

延べ21件の支援対象のなかから4ヶ所を訪ね、現在の状況を見、抱える課題を聞いてきた。

NPO法人
交流ステーションみのり

NPO法人
懸の森みどりファーム

公益社団法人
sweet treat 311

ど真ん中・
おおつち協同組合



●平成24年度、25年度、26年度支援対象

NPO法人 懸(かけ)の森みどりファーム

(代表者:半杭 一成氏)

●福島県南相馬市小高区

福島第一原発から20km圏内の畜産農家12人で構成する特定非営利活動法人である。大震災の翌日、国からの「避難指示」が発令。家族同然の動物たちを置き去りにする突然の「避難指示」にかつてない動揺と戸惑いを覚えながら、指示に従わざるを得ず避難した。拭えない悔恨を抱え続ける一方で、今後の仕事のこと、生活のことに向き合わねばならない。苦悩に満ちたさまざまな局面に対処しながら、平成24年9月、地域の同業者が集まり、半杭一成さんを理事長とする「懸の森みどりファーム」設立を決定。12月に認証を得て、活動を開始した。

現地訪問のとき、取材班は国道6号を北に向かった。原発事故後、帰還困難区域に指定されたが、2014年9月以降、自動車のみ自由通行が可能となったという。

ようやく自動車通行可能になったその道を北上した。富岡町から大熊町に入ると、道の両側には人の気配がまったくない建物が並んでいる。一見して、普通の住宅や事務所ビルの入口は、しかし、すべて厳重に封鎖されており、人が立ち入ることはできない。時が止まったような町、町の跡。一方で、道を行き交う車は途切れることがなく、止まることのない経済活動という現実をまざまざと見せつけているようだった。

大熊町では、全町民約11,500人が町外への避

難生活を余儀なくされているという。未だに本格除染の計画は進まず、町の復興はさらに長期化している。大熊町から双葉町を通過、懸の森みどりファームのある南相馬へと進んだ。

懸の森みどりファームは、その名の通り、美しい木々の緑に囲まれたところにあった。出迎えてくれた半杭一成さんは、笑顔が思いのほか、明るく柔らかい。

牛舎に、かつて牛舎だったところに案内された。4年半経った今もなお、牛の息づかいが感じられるような濃密な空気がそこには残っている。そして、奇妙にえぐれた柱。それは、餌が尽き、食べ物がなくなったときにつながれたままの牛が食べた跡だという。

半杭さんの淡々とした語り口が胸に迫る。

3月11日に地震が来て、12日には国から避難指示が出た。牛を置いては避難できないと思っていたが、仲間5人で話し合っただけで14日の夜にはもう限界だということになった。そのときは1週間くらいで帰るつもりで牛の餌を置いて避難した。うちは乳牛だから、乳搾りをしないと乳が張って可哀相なんだけど…。

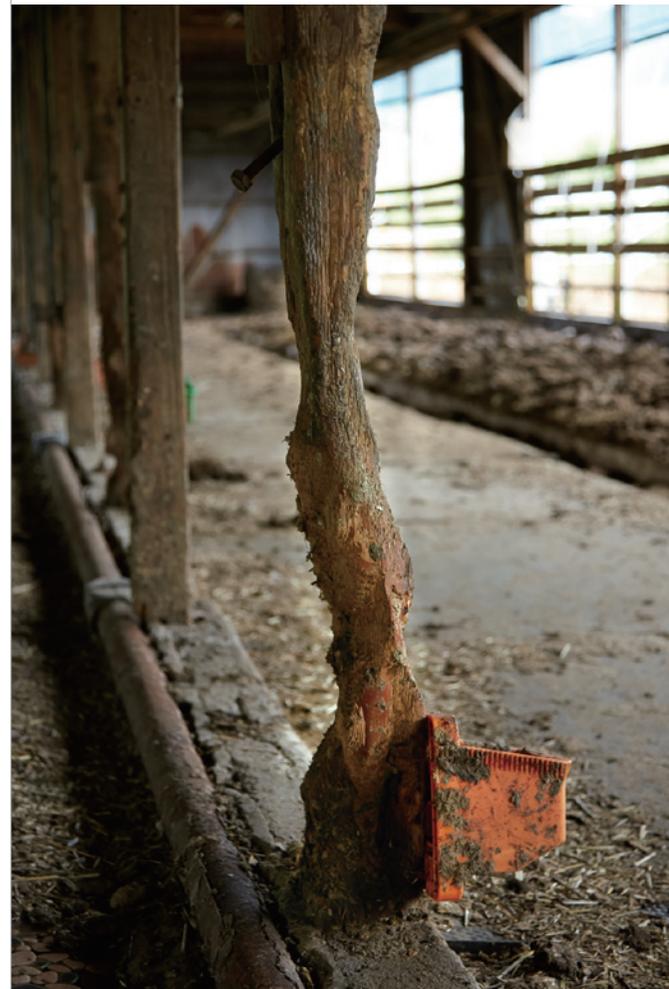
4月10日に姪の結婚式があって、式服を取りに自宅に帰った。牛たちのことが気になったけれど、怖くてのぞけなかった。あのとき、鳴き声がかすかに聞こえていた。

3月20日、福島県内集乳中止指示、県内全域の生乳出荷自粛要請。21日に国より福島県産原乳の出荷制限指示。事態がどんどんと深刻化していくなか、5月12日には20km圏内の飼畜の安楽死が決定、措置が始まった。

半杭さんが実際に牛舎に戻ったのは、6月10日が最初。そこで目にした光景は、すでにミイラと化した牛たちと億万匹の蠅とウジ虫、まさに地獄だったという。牛を引き出し、牛舎が空になったとき、初めて無惨にえぐれた柱に気付く。作業していた者全員が息をのみ、口を閉ざしたと語る半杭さんの眼には冷静な口調とは裏腹の光るものが見えた。

そんななか、無人となった住宅等を荒し回って

いる放れ畜問題が浮上。9月には市役所からの要請により放れ畜の飼養管理と調査研究のための「家畜一時飼養管理組合」設立。東北大学を中心とするグループと北里大学獣医学部による被爆牛の解剖調査、さらに牧草・土壌の放射性物質等の分析調査研究が始まった。なかでも、県の家畜保健研究所の方々は早々に状況を見て回り、対策を講じた。「牛のこと、豚のことを本当に真剣に考え動いてくれた。感謝している」と半杭さんは語る。



「柱を食う」牛がそこにいた証。半杭さんはこの柱が写った写真を「自分を戒めるために」今も肌身離さず持ち歩いている。畜産農家の苦悩については、懸の森みどりファームの記録集『被災牛と歩んだ700日』に詳しい。かつてここには牛たちがいて、搾乳に励んだ日々があった。誰を恨むわけでもなく、弱音を吐くわけでもない半杭さんの言葉、ただ淡々と語られるその言葉の重さに胸がつぶれそうになった。





入口に「除染作業終了」の掲示があった。牧草地の再生と利活用を図るために、土壌の回復に取り組んでいる。さまざまな実験的取り組みを経て、放射線吸収は確認できないという数値的結果を得ている。しかし、風評被害は簡単には収まらない。2016年春、あの日から5年経って避難指示も解除され、帰還する予定だ。まず、牛たちの慰霊碑を建てて、飼料作物地域として道を築いていきたい。畜産農家七代目の半杭さんは、そうなったら「私が初代ということになるね」と笑った。



どうにかしてここに戻りたい。また畜産をやりたい。どうにかして、牧草地の再生と利活用を図りたい。そのためにすべきことはまず土壌の回復だ。

かつて研究助成で浦上財団との縁があった息子に聞き、県の試験場の人と知り合い、同財団に申請を出すことになった。初年(平成24年)度の申請書の活動名は「原発事故による放射能汚染農地の再生から酪農業の再開を目指す」。目的には以下を記した。

「事故後2年間放置された農地の除草と表土除去等を試験的に実施し、牧草・コーン等の飼料作物を試験栽培する。餌となる飼料を自家栽培して酪農業の再開を目指す。飼料作物の試験栽培は、農地の復興だけでなく、畜産業復興への足がかりとなり、大きな実証資料として広く全国の家畜飼養農家と共有することで連携体制確立も期待できる」。

この後、2013年(平成25年度)、2014年(平成26年度)と3年連続して、財団の助成対象となる。

初助成申請直前の2012年夏時点では、南相馬市小高区の農地はまだまったく手つかず。セイタカワダチソウが辺り一面生い茂っている状況だった。

2012年11月に財団から1回目の助成金を受け、活動がスタート。原発事故後、放射線被爆を受け除染した旧警戒区域農地を飼料作物試験栽培圃場として選定し、耕起法の違いによる放射線量の影響、作物の生育状況を調査した。農地はロータリー耕起よりも深耕反転のほうが表面線量も下がり、作物への吸収は基準値以下になるという結果を得られた。一方、農地へのゼオライト散布による吸収の違いには大きな差は見られなかった。

助成2年目には、栽培面積を増やし、農地条件の違いをみるために距離的に離れた圃場を選定。栽培品種も2種類に限定して圃場環境の違いによる放射線量の吸収や作物の生育の差などの検証を進めた。

2年継続して栽培した結果、土壌からの放射線吸収は数値的にも確認できなかったが、旧警戒区域からの生産物に対する風評被害は払拭できず、特に酪農用飼料としての使用はまったく受け入れ

られていない状況が続いている。

半杭さんは、「多角的な可能性も探りながら、継続栽培のなかで集めてきたデータを参考にして多収穫をめざすための栽培法研修も進めていきたい」と語る。

人生があの日から本当に変わった。風評被害の払拭は簡単にはできそうもない。それでも、原発を恨むというより、ただただ牛たちに申し訳ない気持ちでいっぱいだ。

あんな思いはもう二度としたくない。あの日から5年経つ2016年の春には避難指示も解除され、帰還できる予定だ。帰ってきたら、まず牛たちの慰霊碑を建てようと思う…。

優しい表情に潜む悲しみの深さはいかばかりか想像もできない。頑張っている人を前にして、頑張ってくださいという言葉は声にはできず飲み込む他ない。

飼料作物の畑を案内してもらった。モロコシ、キビ、タカキビ、カゼタチ等々。風速40メートルの風にも耐えた作物もある。東大の先生からセシウムを吸収しないと聞いて育てている作物もある。事故後、イノシシとサルが増えたのだという。電気柵も設置して、対策にあたっているようだ。

飼料作物地域として成功し、酪農場を通してそれを提供できるようになれば、それが一番いい。

半杭さんは代々続く畜産農家の七代目。「でも、戻ってきたら、私が初代ということだね」と笑った。

地域のリーダーとして、懸の森みどりファームの代表として、半杭さんにはなんとしても、もうひと頑張りしてもらわなければならない。

震災後、半杭さんは食事のとき祈るように手を合わせて「いただきます」というようになったそうだ。「いただく」とは「命をいただくこと」。食は命をいただき、命をつなぐ行為。食が根源的にもつ意味を改めて噛み締めながら、懸の森を後にした。

●平成25年度、26年度、27年度支援対象

特定非営利活動法人
交流ステーションみのり
●福島県いわき市

障がいを持つ子どもたちの親がグループを作り、自らの手で「仕事」を創造し、障がい者がいきがいを感しながら就労できる環境づくりをお手伝いすることを目的とするNPO法人。それが、「交流ステーションみのり」である。福島県いわき市。休耕地を借りて、農作物の栽培・加工とクラフト製品の制作・販売を中心に活動している。干し芋加工から始まった活動は栽培品目と領域を拡げて、加工品は生の状態で1回、干した状態で1回と2回の放射能残留検査を行い安心安全を確認・訴求しながら、いずれは販路も拡大していきたいと考えている。

特定非営利活動法人「交流ステーションみのり」は、知的障がいのある児童・生徒の保護者たちが立ち上げたNPO法人。障がいのある者でも働きがいのある職場で就労できるように、保護者たち自身の手で福祉作業所等に委託する仕事を創造することを目的に、活動している。

一方で、福島県いわき市には福島第一原発事故に伴って避難を余儀なくされている人々が数多く暮らしているが、地元でうまく溶け込むことができずに孤立化しているケースも少なくない。そんな人々のなかには農業経験者が多くいることから、彼らに対する農業活動への勧誘も積極的に行っているという。

活動の柱となっているのは、休耕地となっている農地を借り受けてのサツマイモの栽培収穫・干



し芋加工・販売。そのなかの一部工程を福祉作業所に作業委託している。

2013年(平成25年度)には、浦上食品・食文化振興財団からの助成で、事業基盤の整備にあたった。まずは、干し芋の調理に必要な厨房ガス工事業とIH調理器の購入。そして、ドカ雪で破損してしまった、干し芋乾燥に必要なビニールハウスの修繕を行うための用具、調理したサツマイモを広げて干す作業台とその架設に必要な器具を購入した。少額の助成金は他にもあるが、まとまった額はありがたかった。しかも、用途に関する縛りがほとんどなかったことが嬉しかったと代表の白川くみ子さんはいう。



干し芋乾燥に必須のビニールハウスにて、ドカ雪で破損してしまい困っていたとき、財団の支援で修理ができて嬉しかった。干し芋調理に必要な厨房ガスの工事もでき、IH調理器も購入できた。干し芋加工台もそう。「浦上財団には本当にお世話になりました。ありがとうございました!」。お母さんたちの明るく元気な声がビニールハウス内に広がる。中には、いわき市の仮設住宅で暮らしているボランティアも。農作業を通して気持ちのよい仲間づくりが進行している。



早速、農地へ向かった。ビニールハウスで待ち受けていたのは仲間たち。交流ステーションみのりは会員10名、ボランティア5名で活動している。会ったとたん、「財団の支援でビニールハウスの修理ができた。干し芋加工台もすごく助かっています!」と口々に声をかけられた。ビニールハウスは雪や風でひどく傷んでいたらしい。この日、お会いしたボランティアのおふたりはいわき市に避難し、現在、仮住まい生活をしている方たちだという。農業は未経験だったけれど、ボランティア募集のチラシを見て参加した。「一緒に農作業をしていれば、私たちも気晴らしにもなります。それに作物が成長していくのは楽しいですね」。

そもそも、全員、農業経験はまったくなかったという。しかし、障がい者にでもできることがある。親が子どもたちのために仕事を作れないだろうか。その思いは集った全員に共通していた。

2010年、どうしたら良いか、なにをしたら良いのだろうか。集まっては話をし、ネットで情報を集め、そして、協議。何回もそれを繰り返し、その年の秋に畑をやってみようということになった。貸してもらえぬ休耕地も見つかった。いろいろ調べた結果、サツマイモ栽培が素人に一番つくりやすいと知り、なにより、風が強くて有名な気候が本場の茨城に似ているとわかって、干し芋加工を目標に決めた。茨城に研修にも行った。そして、あの震災、津波。ガス管や水道管がやられてしまい、1ヶ月も復旧に時間がかかった。それでも、自分たちの思いは揺らぐことなく、かえて強く結集していった。

みんな、明るく元気なお母さんたちだ。障がい児を抱えている苦労も自然のなかで土を相手に作業していれば、「ストレスも解消できるし、なにより気持ちいい!」と笑顔が弾ける。農作業は気分転換になる。土や草を相手に、無心に作業する気持ち良さがある。周囲の農業者がいろいろ教えてくれるのだそうだ。どんな様子か気にかけて、声をかけて細かくアドバイスしてくれる。2014年にはサツマイモの収穫量が850kgになった。まもなく、1トン



干し芋に適したサツマイモと焼き芋に合うサツマイモと、ふたつの品種を栽培している。土に触れ、おしゃべりをして、体を動かす。障がい児を持つ母たちにも、仮設住宅に暮らすボランティアにも、自然のなかで取り組む農作業は格好の気晴らしになっているようだ。一方で、ポプリを入れた小型バッグの製造から始まったクラフト製品づくりもかなりの好評を得て、活動範囲がどんどん広がっているという。クラフト製品も農作物加工品も、袋詰めや台紙づくり、スタンプ押しなど作業の一部を福祉作業所に委託している。これこそが交流ステーションみりのりの大命題。同じ境遇の親たちのモデルケースになりそうな可能性を感じた。



を越すだろう。2015年の3月からはトウモロコシも始めた。「自分たちが食べたくて、加工しやすいもの」。それが作物選定の条件だと笑う。メロン栽培をしたいという意見も出たが、年間を通して活動できるものでないという理由で却下になったそうだ。

5ヶ所の福祉作業所に作業の一部を委託している。袋詰め、商品シール貼り、ラベル付け、スタンプ押し等々。パッケージやラベルは会員のひとり、保田左幾子さんが経験を活かしてデザインしている。

食べ物をつくるのは楽しいし、収穫は喜び。でも、夏の草むしりの時期は毎日プチ熱中症だと笑う。子どもたちの通う養護学校が夏休みなので、1ヶ月、農作業はブランクになってしまう。夏休み中に手入れなくてもいいものでなくては続けることができない。

取材時はサツマイモの本格的収穫時期には少し早かったが、農地に出て実際に土を掘ってもらった。

「あれ？ モグラにやられた?」「ああ、そうだね。やられてる。しょうがない。焼いて食べちゃおう」「あっ、これ、この肌が白いのはすごく甘いですよ。焼き芋にしてもいいし、干し芋も美味しい」。

収穫したら、1~2ヶ月寒風にさらして熟成させる。それが美味しい干し芋づくりのポイント。商品名は「たべてほしイモン」。ネーミングもデザイン同様、保田さん作である。できあがった干し芋は業務用冷凍庫を購入して冷凍。メンバー所有の倉庫を作業場に改修して設置したセラミックオーブンで1時間ほど焼けば、いつでもホカホカできたての美味しさを味わうことができるようになった。学校やイベントに出店して、手づくり販売を行っている。介護施設にもとても好評だったという。どこでも濃厚な甘さと香ばしさが評判だ。まだまだ地産地消だが、規制をクリアできれば、販路を拡げることも検討にあがっているようだ。リクエストも多いらしい。目下挑戦中だという黒豆茶と一緒に供していただいた焼き干し芋は、濃密な甘味が口いっぱいに広がる幸せな味がした。

新たに栽培を始めたトウモロコシは、収穫量があがったら、コーン茶に加工して販売したいと思っている。

元気なお母さんたちのアイデアとエネルギーは尽きない。それでも、「福島産」に対する風評被害は簡単にはなくならない。毎年、生の状態で1回、干した状態で1回、計2回放射能残留検査をし、ND(不検出)を確認してもらってから出荷している。少しずつ着実に、生産が拡大し、販路が拡がり、それにつれて、安心安全が広く理解されるようになっていけばいいと心から願いながら話を聞いた。

農作物を栽培し加工する作業の一方、クラフトアイテムもつくっている。ポプリを入れた小型バッグの製造を手始めに、少し大型のバッグやコースターの制作にも手を広げている。

いずれにしても、作業工程のどこかで、知的障がい児の就労を可能とする作業をいかにしてつくり出すかが最大の課題だ。干し芋を入れる紙袋の制作、紙へのスタンプ押し、ポプリを詰める作業、台紙づくり等々。大命題はそこにあり、それはそれだけで、全国の同じような境遇にある親たちのモデルケースになりそうだ。障がい児の母親は細切れの時間、刻みの時間しかとることができない。学校が休みのときはもとより、普段でも子どもたちが学校に行っている時間をいかに効率よく使って作業するかが勝負だ。母親が主体となってこのような活動を立ち上げ、継続しているケースはまだまだ少なそうだ。この命題に加えて、原発事故による避難生活を余儀なくされている人たちの生活指針にもしていこうとしている。

土に触れ、おしゃべりをし、気持ちをリフレッシュして、健康な生活を満喫する。みんなで元気になろうという意志が、ここには確実に、ある。



特定非営利活動法人
交流ステーションみりのり
代表の白川くみ子さん

●平成25年度支援対象

ど真ん中・おおつち協同組合
●岩手県上閉伊郡大槌町

東日本大震災が引き起こした津波とその後の火災によって壊滅的被害を受けた岩手県大槌町。事業所や住宅等、あらゆるものが破壊され、町民は生活基盤を一瞬にして失った。大槌町は元来、水産業の町として栄えてきた歴史を持つ。漁業者から水産加工業者、販売・流通業者に至るまで、その経営基盤を失った水産業の早期再建が町全体の復興に極めて重要と考え、立ち上がったのが、「ど真ん中・おおつち協同組合」である。海と共に生きる町・大槌。津波が来た町ではなく、「三陸のど真ん中・おおつち」として全国に発信していきたいと奮闘している。

岩手県東部、陸中海岸中央から少し南に位置する大槌町。総面積200.59km²、現人口12,394人。穏やかな波が揺れる大槌湾には、ひょっこりひょうたん島のモデルと言われる蓬莱島が浮かんでいる。江戸時代初期に考案された新巻鮭を江戸に出荷することで栄えた町である。鮭の他にも、ウニやイカ、サンマ、カキなど海産物の水揚げも多く、特に水産加工業は町の軸を担ってきた。

2011年3月11日14時46分、東北地方太平洋沖地震発生。この地震が引き起こした大津波とそれによって発生した火災により、町役場庁舎にいた町長他職員40人を含め死者779人、行方不明者数952人。町は壊滅的被害を受けた。

地震が起こったとき、「ど真ん中・おおつち協同組合」理事長の芳賀政和さん(芳賀鮮魚店)は、宮古市を走行中だった。「凄い揺れで、隣の4トントラックが覆い被さりそうだった」という。「家内が車から出ようとしたので止めた。地震の後には津波が必ず来るから高台に逃げろ。親父がいつも言っていた言葉を思い出して、宮古の河南中学校に上がった。岬を見たら、真っ白になっていた」。それからどうやって家に帰ったのか、はっきりとした記憶がないという。「たぶん夜8時頃、家に着いたのだと思う。道路は凍っていて、電気はぜんぶ消えていた。目標も見えないなか、どうにか車を走らせて家に帰った」。途中、ガスボンベが爆発して火の手が上がり、まるで戦争のようだったという。

家は瓦礫と化していたが、どうにか手直しして住むことはできた。でも、店はすっぽりなくなっていた。電気も水道も止まっている。なにをどうしたらいいのか。なくなってしまった店を見に行ったり、きれいな海をただずっと眺めたり、なにも考えられず、なにもする気にならず、まるで惚け老人のような日々が3ヶ月も続いた。

そんな日々のなか、被災者説明会が役場で開かれた。同業者で旧知の浦田さん(浦田商店)と会って、このままでは全滅、みんなダメになってしまうと話した。まず、ご飯を食べよう。一緒にご飯を食べたとき、きれいな虹が見えたという。動かなくては、きっと動き出せる。小豆嶋さん(小豆嶋漁業)を誘って、3人。組合の仮設を借りて事務所をつくりたいと申し出たら、すんなり貸してくれた。事務局にひとり、パソコン1台。もうひとりの仲間、齊藤さん(ナカショク)が加わって、計4人。全国に向けて「やる気はあります。ノウハウもありますが、資金がありません」と呼びかけたところ、各地から応援してくれる人がどんどん集まってきた。1口1万円円で寄付を募り、お礼に海産物を送るサポーター制度である。立ち上がりは早かった。



大槌湾に浮かぶひょっこりひょうたん島のモデルとなった蓬莱島。

穏やかな海があの日、突如豹変した。一時は呆然自失。まるで惚け老人のようだったという芳賀さんは、やがて仲間を誘って4人で水産業再建のために立ち上がる。三陸のど真ん中だから、「ど真ん中・おおつち」。自分たちには大槌町の復興を牽引しなければならない天命がある。長年培った知恵と技術がある。決して諦めない。それが海の男のモットーである。



ど真ん中・おおつち協同組合の社屋であり、リアルショップでもある建物は、大槌湾のすぐそばに、2015年3月完成した。中には、財団の支援によって購入した冷凍ショーケース。このショーケースに商品が途切れないうようにしたい。しなくては、と芳賀さん。町民も、イートインスペースが本格的に移動する日を待ち望んでいるようだ。事務局の小林さんも頑張っている。芳賀さんに、あるサポーターからの熱い気持ちが詰まった手紙を見せてもらった。全国のたくさんの人たちが応援している。応援したくなる魅力が芳賀さんには溢れている。



そんなとき、朝日新聞の記者が取材に来て、8月16日の朝刊に記事が掲載された。その日の朝5時40分、「私の携帯は鳴りっ放し。いろんな人が『応援しますから頑張ってください!』って電話をくれたんだよ」。メールは600通にもなった。みんなにサポーターになってもらった。こんなにいろいろな人が応援してくれている。じゃあ、名前をつけなくちゃ。「大槌は三陸のど真ん中じゃないか!」「そうだ、“ど真ん中おおつち”だ!!」。そのとき、芳賀さんは携帯に頭を下げっ放しだったそうだ。「おじいちゃん、おばあちゃんが『私の年金のなかから送るから』『すぐに返さなくていいから』と言ってきて、お互いに方言がきつくて話がよく通じないと『いい、いい。とにかく送るから!』と」。各家庭には食料配布があったが、商店などには一切援助は来なかった。でも、多くのサポーターがいる。予想を遥かに超える支援の手、サポーターの反響は、4人の仲間たちにどれほど力強い支えとなったか、想像に難くない。

「海のすぐそば、津波に襲われたところでのいいのかという思いもあった。でも、俺はもうここを動かない。海が見えるところ、訪れた人が新鮮な食材で食事できる場所で仕事を再開したい。とにかく仕事がしたいんだ。だから、建物だけはなんとか建てて欲しい」。何度かのやりとりの後、中小企業基盤整備機構の支援制度を活用してプレハブの仮設工場が完成した。

「サポーターは私たちの宝」と芳賀さんという。「震災から月日が流れて、忘れられかけている。でも、頑張るしかない。なにか行動すると必ず反応があるからね」。

2015年(平成27年)3月、待ちに待った「ど真ん中・おおつち協同組合」の新社屋が完成した。魚市場は目の前という立地。かつては町の人々の憩いの場である公園だった場所である。木造平屋の建物はシックな色合いが海の碧と空の青に映え、なかなか洗練されている。事務局の小林さんにお話を聞いた。

「私は地震で家も車も流されました。残ったのは、携帯とそのとき着ていた服のみ」。一端は一緒に避難した息子さんがその後しばらく行方不明になって心配したことも今となっては笑い話という。

浦上財団のことは、東京のコンサルタントの助言で知った。「ハードルが高いかもしれませんが」と言われたけれど、駄目もとでやってみようということになった。支援が決まり、仮設事業所内に仮設置される冷凍ショーケースを購入することができた。全国のサポーターに郵送する商品パンフレットも制作した。

人気商品は三陸産のイカくちっこ煮。大槌町民にはおばあちゃんの味、懐かしい味なのだという。「サポーターがいなければ、今はなかった。働けるということは本当に素晴らしいことだよ」と芳賀さん。財団のお金で冷凍ケースを購入して、そのなかに入れる商品を切らさないようにしている。「浜に町の人が降りてきて、買い物をしてくれるようになった。食堂はなかなか開店できないけど、なんとか頑張っていきたい。浜が元気になることが目標だからね」。

支援から自立へ。道はまだまだ遠いが、それでも、大槌は「ど真ん中・おおつち協同組合」の踏ん張りもあって、少しずつ着実に前に進んでいる。



「芳賀鮮魚店」にて奥様と。もちろん、ここも仮設である。

●平成24年度・25年度・26年度支援対象

公益社団法人
sweet treat 311
●宮城県石巻市雄勝町

公益社団法人 sweet treat 311は、東日本大震災における被災地のこどもたちを笑顔にする支援活動を行うために設立された。現在は、宮城県石巻市雄勝町を中心に活動している。こどもたちがさまざまなことを感じ学ぶ場を創造することを目指すと同時に、地元の方々が主役となって運営することで地域の再生も目指している。sweet treat 311の名には「優しいケアを」という想いが込められている。東北のこどもたちが未来を自身で描けるようになるまで、活動を展開・継続していくという。平成26年度総務省「ふるさとづくり大賞」、第三回日本経済新聞社「日経ソーシャルイニシアチブ大賞」受賞。

東日本大震災被災地で食と教育を支援する「公益社団法人 sweet treat311」代表理事が立花貴さんである。仙台生まれ・仙台育ちの立花さんが、どのような経緯で「sweet treat311」を立ち上げ、どのような想いを抱えてさまざまな活動に精力的に取り組んでいるかはご自身の著書「心が喜ぶ働き方を見つけよう」に詳しい。

立花さんは、東京で商社勤めを経て食品流通系の会社を立ち上げ、その後、地域活性化事業会社を経営し、いそがしい毎日をすごしていた。そして、2011年3月11日午後2時46分。乗っていた電車が大きく揺れて緊急停止。地震発生のアナウンスに、小学3年で経験した宮城県沖地震の恐怖が甦ってきたという。

仙台市には母と妹が暮らしている。ふたりの無事を祈りながら翌日車で向かった。そして、国道45号線を多賀城方面へ向かい、七北田川を越えるあたりから信じられない光景を目にする。2階建ての家が川の真ん中まで流されていた。沿岸部は真っ黒な泥があたり一面を覆い尽くしていた。母と妹は無事だったが、住まいは電気もガスも水道も止まっていて生活できる状態ではない。いったんふたりを東京の家に送り届けて、すぐにひとり仙台に引き返した。

食事でも満足にとれない避難所の人たちの姿が頭から離れなかったと立花さんはいふ。無我夢中で登山用リュックに物資を詰めて、寸断されている道路を強引に進んだ。どこに行くというあてがあったわけではなく、実家に泊まりながら、毎日あちこちの避難所をまわり、炊き出しの手伝いをしたり、物資の配給を手助けしたり、無我夢中で動いた。震災から2週間が過ぎても、避難所によっては食料や物資が十分に行き渡っていないところがあった。配給される食事でも飢えをしのぐための食糧であって、食事ではない。被災者の人たちに、ちゃんとした食事をして欲しい。少しでも元気が出るよう、温かくておいしいものを食べさせてあげたい。その一心だったと立花さんは著書に記している。

おいしいものはお腹を満たすだけでなく、心も満たしてくれる。

震災から1ヶ月経った4月中旬、仲間といっしょに震災地で支援活動をしていたとき、知人の紹介で石巻市立雄勝中学校校長の佐藤淳一さんと出逢う。「こどもたちにひもじい思いだけはさせたくない」。佐藤さんの言葉に「わかりました。給食のおかずをつくって学校まで届けます」。間髪いれず、立花さんは答えていたという。さっそく、惣菜仕出しの店を切り盛りしていた妹に協力を頼む。「いいよ。毎日何食分？ 何時まで?」。そう即答した妹さんの胆力に驚いてしまう。この兄にしてこの妹あり。佐藤先生のわき上がるエネルギーも相当だったのだろうが、それを真っ正面から受けとめて行動に



浦上財団の助成は、当初、高台にある古民家で行われた料理体験プログラムの実施にあてられた。玄関には「おがっアカデミー」の表札。中に入ると、訪れた人々が残したたくさんのお寄せ書きがあった。こどもも大人も日本人も外国人も異口同音に残している。「楽しかった!!」



移す立花さんと妹さんのエネルギーに感服する。翌日から、雄勝中学校の生徒と職員、そして小学生の分を合わせて100食の調理と配達が始まった。毎日、大規模半壊認定を受けていた立花さんの実家のキッチンで調理し、片道2時間かけて雄勝まで運ぶ。それが仙台青年会議所にバトンタッチされるまで2週間続いたという。

宮城県石巻市雄勝町はホタテやカキ、ワカメの養殖が中心の漁業の町。以前からの過疎化、少子化の進行に加え、震災の震源地に最も近く、津波で建物の8割が流されるという壊滅的な被害を受けて、人口も8割が流出。住民票ベースで1,300人、こどもをもつ世帯の多くが雄勝を離れ、実質1,000人にまで減少した。

雄勝に拠点を定めた立花さんたちは、2001年に廃校となった築93年の旧桑浜小学校を活動の舞台とすることを決め、購入。漁業や林業などの一次産業の体験を全国のこどもたちに提供することを目標に新たな活動を開始した。宿泊施設も備えた学校として大きくリニューアルするために、クラウドファンディングを活用して寄付を募る。2013年4月、約200人の全国から集まったボランティアと共に「雄勝学校再生プロジェクト」がスタートした。リピーターも数多く、約2年3ヶ月の間に合計で5,000人もが学び場づくりに関わったという。立花さんの盟友である油井元太郎さんの縁でアメリカのスタンフォード大学や東京大学の学生らも学校建設のデザインワークショップに参加。日本にとどまらず、世界中に発信した。そして、2015年7月、複合体験施設「MORIUMIUS（モリウミアス）～森と、海と、明日へ～」誕生。森と海に恵まれた自然のなかで、循環する暮らしを体験する。「US」には「私たちみんなで明日を創る」という意味も込められているという。立花さん、油井さんを除く「モリウミアス」のスタッフは7名。内3名は地元の若者である。こどもたちのための複合体験施設だが、雄勝アカデミーも併せて、大手企業の研修やオフサイトミーティング、新入省行政官研修なども頻繁に行われて

いる。日々の業務を事務局員と同様に行うインターン生にも、国内は元より海外からも多くの大学生や大学院生が参加している。こどもの複合体験施設「モリウミアス」は、地域と都市部、日本と海外のこどもが共同生活を通じて多様性を学び、農林漁業など一次産業や自然体験を通じて地域と人に触れ、持続可能社会を学ぶ場として、大きく機能し始めた。

さまざまな活動のなか、浦上財団からの助成は料理体験プログラムの実施に向けられてきた。当初はまだ「モリウミアス」がなく、車で海から5分ほど登ったところにある古民家が活動場所だった。長いあいだ、大切に住まれてきた家は大勢と一緒に生活をするにふさわしい。「雄勝アカデミー」と名付けられたその場所で、地元の農家や漁師から仕入れた野菜や魚介を用いた料理づくりを実施した。被災したこどもたちがプロの料理人から直接料理を教えることで食材に関する知識や栄養を学び、食材がどのように作られ、穫られるかを知り、旬や「命をいただくこと」への理解を促すことで、作る喜びや苦勞、食べる幸せを実感するというプログラムだった。2年目からは主として地元出身者を講師に料理教室を開催。地元食材への理解や生産者の想いに触れ、作り手への感謝の気持ちを育むことに腐心する。

3年目となる平成26年度(2014年)には、こどもたちが実際に魚介類を捌くといった体験を通して「命をいただく」と向き合うきっかけとなるよう努め、こどもたちの生きる力を形成していくことを主眼とした。

財団からの3年にわたる助成で、多くのこどもたちに学ぶ機会を提供し、プログラムとして確立することができた。今後は、料理教室を持続的に運営していくために、地元のお母さんや若手ママたちを中心とし地元講師による自立した運営体制を推進していく。

「モリウミアス」が完成した2015年夏以降は、体験プログラム～料理教室も、「モリウミアス」内のキッチンに引き継がれた。地元漁師がホヤを捌い

てみせるといったプログラムも実施された。雄勝のこどもも都会のこどもと変わらない。魚を触ったことがないという地元のこどももいる。「雄勝の良さを他所から来た人に教えてもらう良さも『モリウミアス』にはある」と立花さんは笑った。

平成29年(2017年)には、現在、町外の仮設校舎で運営されている小・中学校が統合・再開される。いまだに仮設店舗は1店のみ。まだまだ生活は困難を極めるだろう。しかし、「実質1,000人の住民の町に、10,000人のインバウンドというストーリーを考えている」と立花さんは語る。自身はもちろんのこと、仲間も一緒に住民票をこの町に移した。「ひとりがこどもを3人産めば、ほら…。夢物語を語っているようで、実行プログラムもすでに描いているに違いない。そう思わせる、信じさせる力がこの人にはある。

「2016年3月がひと区切りだと思います。いろいろなことがそこから始まる」。

3年の助成期間が終了して、財団との関係もひと区切りである。しかし、いったん、応援団に加わった人は半永久的に応援し、それぞれができるかたちで支援していくのだろう。立花さんと話をし、そう納得した。



2015年7月、複合体験施設「モリウミアス」がオープン。2001年に廃校となっていた旧桑浜小学校を再生した。宮城県内で2番目に古い学校校舎は東京駅舎と同じ、雄勝石のスレート屋根。屋根はもちろん、廃校時に生徒たちが書いた「さよならメッセージ」黒板や廊下の掲示物など、

当時のものがそこに残っている。延べ約5,000人のボランティアと地元住民が2年がかりの再生プロジェクトに携わり、44床の宿泊施設や厨房付き食堂を備えた体験学習拠点が完成した。屋外風呂だってみんなの手づくりである。モリウミアス: <http://www.moriumius.jp>



東日本大震災復興支援 実績リスト

2012年度 (平成24年度)

支援テーマ	支援団体(代表者)/活動場所・期間	支援金額
漁業・農業・料理体験プログラム	一般社団法人 sweet treat 311 (代表者:立花 貴) 活動場所:宮城県石巻市雄勝町 活動期間:2012年11月~2013年10月	1,000,000
おばあちゃん弁当 配食サービス	オアシス (代表者:大泉 功太郎) 活動場所:宮城県岩沼市内 活動期間:2012年11月~2013年10月	1,000,000
原発事故による放射能汚染農地の再生から酪農業の再開を目指す	NPO法人 懸の森みどりファーム(認証申請中) (代表者:半杭 一成) 活動場所:福島県南相馬市小高区 活動期間:2012年11月~2013年10月	1,000,000

●募集期間:2012年9月24日~10月20日 ●申請件数:7件

2013年度 (平成25年度)

支援テーマ	支援団体(代表者)/活動場所・期間	支援金額
大槌産水産加工品の新商品拡販	ど真ん中・おおつち協同組合 (代表者:芳賀 政和) 活動場所:岩手県大槌町赤浜 活動期間:2013年10月~2014年9月	1,000,000
漁業・農業・料理体験プログラム	公益社団法人 sweet treat 311 (代表者:立花 貴) 活動場所:宮城県石巻市雄勝町 活動期間:2013年10月~2014年9月	1,000,000
牡鹿産海産物の加工・販売	折浜マザーズ (代表者:相澤 裕子) 活動場所:宮城県石巻市折浜 活動期間:2013年10月~2014年9月	700,000
相馬新ブランド水産加工品の発信力強化活動	NPO法人 相馬はらがま朝市クラブ (代表者:高橋 永真) 活動場所:福島県相馬市尾浜 活動期間:2013年10月~2014年9月	500,000
原発事故による放射能汚染農地の再生から酪農業の再開を目指す(2年目の挑戦)	NPO法人 懸の森みどりファーム (代表者:半杭 一成) 活動場所:福島県南相馬市小高区 活動期間:2013年10月~2014年9月	960,000
休耕地の活用と障がい者等の就労支援を目的とした農産物の栽培加工販売事業	NPO法人 交流ステーションみのり (代表者:白川 くみ子) 活動場所:福島県いわき市 活動期間:2013年10月~2014年9月	800,000

●募集期間:2013年6月15日~7月31日 ●申請件数:37件

2014年度 (平成26年度)

支援テーマ	支援団体(代表者)/活動場所・期間	支援金額
ほっこりフーズ文化創造事業	ほっこりみやこ実行委員会 (代表者:金野 侑) 活動場所:岩手県宮古市周辺地域、その他 活動期間:2014年10月~2015年3月	500,000
漁業・農業・料理体験プログラム	公益社団法人 sweet treat 311 (代表者:立花 貴) 活動場所:宮城県石巻市雄勝町 活動期間:2014年10月~2015年9月	1,000,000
東日本大震災被災地石巻市の衣食住の伝統文化を踏まえた新たな地域特産物の創造による生活支援活動	一般社団法人 日本家政学会 (代表者:牛腸 ヒロミ) 活動場所:宮城県石巻市石巻専修大学 活動期間:2014年10月~2015年9月	1,000,000
食育による被災地の農業復興を目指した親子農業食育事業	南相馬サイエンスラボ (代表者:齋藤 実) 活動場所:福島県南相馬市 活動期間:2014年12月~2015年11月	460,000
原発事故による放射能汚染農地再生と飼料用作物栽培技術の実証(3年目の挑戦)	NPO法人 懸の森みどりファーム (代表者:半杭 一成) 活動場所:福島県南相馬市小高区 活動期間:2014年11月~2015年10月	1,000,000
障がい者への就労機会創出と被災者との交流拡大を目的とした農産物栽培加工事業	NPO法人 交流ステーションみのり (代表者:白川 くみ子) 活動場所:福島県いわき市 活動期間:2014年10月~2015年10月	1,000,000

●募集期間:2014年8月1日~31日 ●申請件数:13件

2015年度 (平成27年度)

支援テーマ	支援団体(代表者)/活動場所・期間	支援金額
大植の食文化伝承と新たな食創造及び地域コミュニティ再構築プロジェクト	NPO法人 まちづくり・ぐるっとおおつち (代表者:小向 幹雄) 活動場所:岩手県大槌町全域 活動期間:2016年5月~2017年2月	800,000
交流イベント等を通じた内陸避難者の生きがいづくり事業	NPO法人 いなほ(代表者:佐藤 昌幸) 活動場所:岩手県滝沢市及び近隣市町 活動期間:2016年4月~2017年3月	737,000
東日本大震災被災者の生活再建のための南三陸直売所みなさん館スペースの拡張と水産設備導入プロジェクト	NPO法人 故郷まちづくりナイン・タウン (代表者:小野寺 敏) 活動場所:宮城県本吉郡南三陸町歌津 活動期間:2016年4月~2016年8月	755,000
仮称 アイランズコート の設立と運営	NPO法人 浦戸アイランド倶楽部 (代表者:大津 晃一) 活動場所:宮城県塩竈市 活動期間:2016年2月~2017年1月	700,000
親子農業食育教室	任意団体 南相馬サイエンスラボ (代表者:齋藤 実) 活動場所:福島県南相馬市 活動期間:2016年4月~2017年3月	1,000,000
継続的な取り組みを通じた原発事故避難者との交流拡大と基盤強化に向けた新商品開発事業	NPO法人 交流ステーションみのり (代表者:白川 くみ子) 活動場所:福島県いわき市 活動期間:2016年2月~2017年1月	1,000,000

●募集期間:2015年10月1日~31日 ●申請件数:33件

● ラオス・浦上ランチプロジェクト活動報告 ●

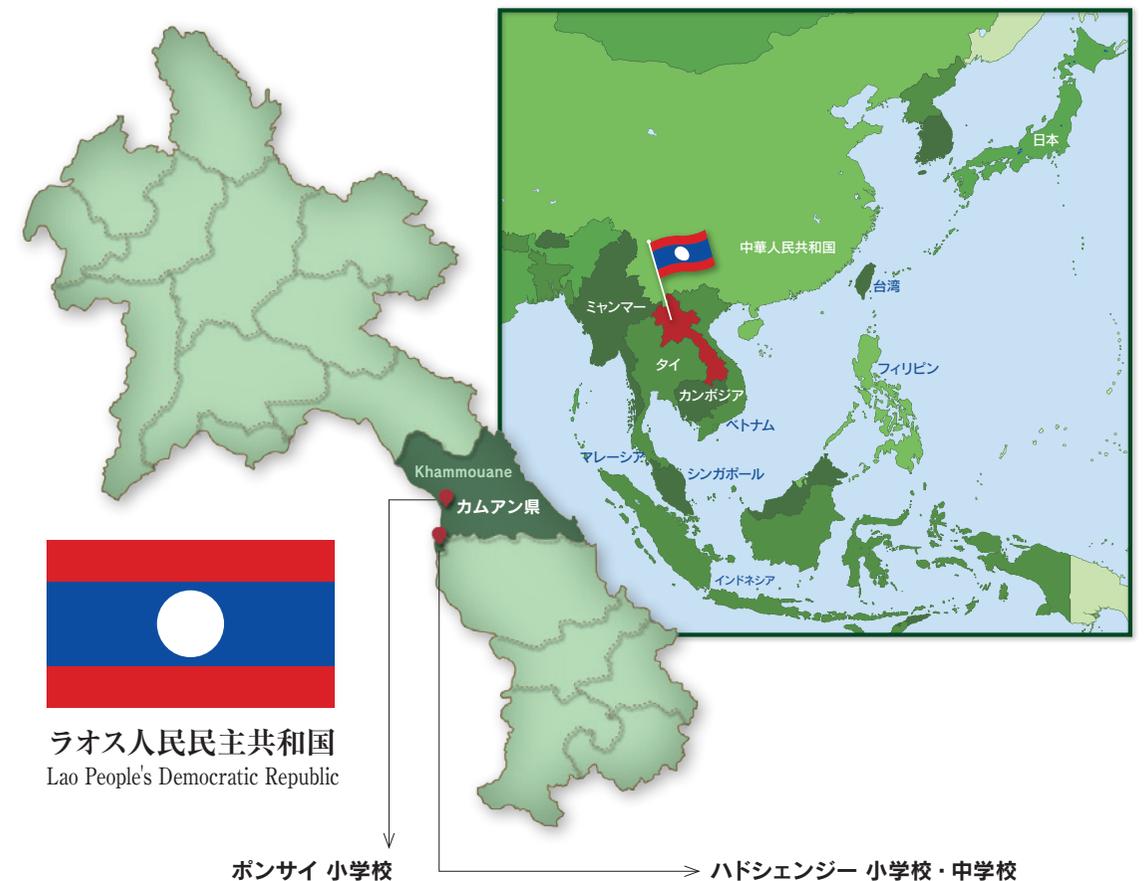
ラオス・浦上ランチプロジェクト

浦上食品・食文化振興財団にとって、初めての本格的かつ継続的な国際活動案件が「ラオス・浦上ランチプロジェクト」である。2012年度から2015年度にかけて、3年計画として公益財団法人国際センターに業務委託するかたちで実行された。

インドシナ半島に位置する共和制国家・ラオス。北は中国、東はベトナム、南はカンボジア、タイ、西はミャンマーと国境を接している。国土面積24万平方キロメートル、総人口約660万人。日本の本州の面積に、北海道の人口が暮らしている。そんなイメージの、小さな自然豊かな国・ラオスで、2012年「ランチプロジェクト」は始まった。対象となったのは、カムアン県の3校～ポンサイ小学校、ハドシェンジー小学校・中学校。3年計画で各校に「ランチ」を定着させる活動を支援するプロジェクトである。



浦上食品・食文化振興財団は、プロジェクトの進捗を実際に確かめるべく、乾期のラオスを訪れた。



民際センターの縁で、財団の国際活動、本格スタート。

2015年2月8日(日)

浦上節子理事長以下一行5人をドンムアン空港で出迎えてくれたのは、EDFタイプロジェクト開発ディレクターの女性、通称プーさん。

ここでまず、浦上食品・食文化振興財団「ランチプロジェクト」への道筋を作ってくれた「公益財団法人民際センター」および「EDF」について記しておこう。

「民際センター」は、秋尾晃正氏が理事長を務め、「民による国際協力活動」を趣旨としている公益財団法人。理事には作家の阿刀田高氏、キリンビール株式会社元常務執行役員の大島仁志氏、日本経済新聞元専務取締役・論説主幹の小島明氏らと共に、浦上食品・食文化振興財団理事長・浦上節子も名を連ねている。

EDF(Education for Development Foundation)とは、その民際センターがタイ、ラオス、カンボジアに事務所を開発・形成した「財団法人地域開発教育基金」グループのこと。メコン地域の各国事務所が相互に協力し、初等中等教育の発展に寄与する活動を行っている。設立以来、多くの寄付者に支えられ、延べ38万人を超える子どもたちに奨学金を提供してきた。現在はミャンマー、ベトナムを加えた、メコン川流域5カ国で活動を展開している。

プーさんが案内してくれたタイレストランで、民際センターの秋尾晃正理事長と富田開発部次長、EDFタイのマネージングディレクターであるサンベットさんと合流。翌日からのラオス訪問を前に、EDFラオ(ラオス)そして浦上食品・食文化振興財団が担当する「ランチプロジェクト」の現状についてレクチャーを受けた。

民際センターはラオス中南部の4県(カムアン、サワンナケート、サラワン、セコーン)を支援してい

るが、そのほとんどが農業を生業としている地域である。メコン川やその支流に近い地域では農産物の収穫がまずまず見込め、対岸のタイに出稼ぎに行き収入を得る機会も少なくないが、メコン川から離れた奥地では出稼ぎの機会もほとんどなく、慢性的な水不足に悩まされている。

ラオスの義務教育は日本の小学校にあたる初等教育(1学年～5学年の5年制)のみ。就学年齢は定められていないが、8割強が6歳で入学する。ただし、貧困、通学困難、保護者の学校教育に対する意識の低さが大きな問題であり、加えて、政府の教育予算が非常に少ないため、校舎がない、教室数が不足している、教科書がない、教員の数および能力が不足している等々、教育行政の立ち後れが非常に目立っている。

民際センターでは、学校校舎の量的不足や質的劣悪さを解消するため、ラオスの土と木で環境に優しい快適な校舎を建てるプロジェクトを立ち上げた。それが「ラオス学校建設プロジェクト」である。新宿NSビル、聖路加ガーデン、JR東日本本社ビルなどの設計で知られる建築家・加藤隆久さんが建築ボランティアとして参加。環境破壊を最大限考慮する現地の赤土を使ったブロックレンガを主材料に、電気が普及していない場所でも快適な自然採光・自然換気を取り入れた教室を実現した。長年の功績が称えられ、2010年には日本建築学会賞を受賞。加藤さんはラオス政府より勲章も授与されている。

そんなラオスらしい校舎で子どもたちがさらに楽しく学ぶために求められること、浦上食品・食文化振興財団にできること…を考えたとき、「ランチプロジェクト」のアイデアが誕生した。

ラオスで、加藤さん設計のあのすばらしい校舎で、現地の人が自分たちの手で子どもたちのためにランチを作り提供する。ランチが楽しみで学校に通う子



対岸のタイに美しい夕陽が沈んでいく。ラオスには発展途上のエネルギーがある。民際センター・秋尾氏の縁で財団の新たな活動が始まった。



が増えればいい。ランチで栄養不足や栄養の偏りが少しでも改善されればいい。みんなで食べることによって、分けあったり、お互いを思いやることを学べるかもしれない。浦上食品・食文化振興財団の国際協力の第一歩がこのようにして始まった。

ラオス国営テレビ15分番組で紹介される。

2月9日(月) タイのドンムアン空港から国内線でナコンパノム空港へ移動。EDFラオ所長のカムヒアンさんの出迎えを受けて、メコン川にかかる友好橋を渡り、タイ出国～ラオス入国。浦上理事長が民際センターの面々と初めてラオスを訪問したときはまだ友好橋が建設中で、メコン川を船で渡り、船上で出入国手続きをしたという。

ラオスには鉄道がないため、移動は自動車である。車窓から見えるのは、民家の軒先にいる10数頭の牛や鶏、バラックのように並んで野菜や花や衣服を売る商店、そして裸足でいる子どもたち。戦後すぐの日本もこうだったと、浦上理事長はいう。タイムスリップしたような不思議な感覚にとらわれた。

滞在先となるホテルで、国営ラオステレビのスタッフと打ち合わせを持った。ランチプロジェクトを取り上げ、15分の番組を制作するという。ディレクターもカメラマンも20代の若者。ラオスでは中等教育(中学校、高等学校)は義務教育ではないため、地方ではまだ進学率は高くない。一方、首都・ビエンチャン特別市などの都市部では中等教育はもとより、高等教育(大学、職業訓練専門学校等)へ進む者も多くなっているという。国営テレビのスタッフはかなりのエリートということになるのだろう。

取材はすでに2度にわたって行われており、今回は3回目。浦上理事長のインタビューも含めて、膨大な取材資料を編集して15分番組となる。放送は、2015年7月19日ほか計4回。後日、日本語での翻訳を得て、ようやく、彼らラオスの人々がランチプロジェクトに大いなる関心を持ちつつ、まだまだ最終的な着地点を思い描けていない様子が伝わってきた。



ラオス国営テレビがランチプロジェクトを取材・編集。15分番組として放映した。浦上理事長のコメントも紹介され、ラオス国民の理解を得るために、またとない貴重な機会となった。ラオスには鉄道がない。車道を牛が悠々と歩いているのも美にありふれた光景だ。



学校に到着するなり、全校生徒の大歓迎を受ける。子どもたちの手には日本とラオスの小旗。そして手製の花束。ここハドシエンジーは小学校と中学校が併設されているので、生徒数も多く、年齢の幅もある。小さい子ども学年が上の子ども、みんな好奇心いっぱいの表情が印象的だ。生活に多少ゆとりがあるのか、裸足の子はほとんど見かけなかった。

校舎ができた。給食も始まった。
だが、もう一歩が難しい。

2月10日(火) いよいよ、最初の訪問校であるハド
シェンジー小・中学校へ向かう。ラオス南部のカム
アン県にあるハドシェンジー村は274世帯、人口
1,463人。平均年収は日本円にして43,000円とい
う地域。ハドシェンジー中学校にはハドシェンジー
小学校卒業生の他、計4つの村から中学生となっ
た生徒たちが通っている。

車から降りた途端、ずらっと並んだ子どもたちの
大歓迎を受ける。子どもたちの手にはラオスと日本
の国旗、そして手づくりの花束。どの子の眼もキラ
キラと澄んでいる。はにかんだ笑顔には、たくさん
の好奇心とほんの少しの不安が見え隠れしていた。

加藤さんが設計した校舎は2009年に竣工した
もの。電気がないこの地で、授業を受けるのに十
分な採光と換気が上手に組まれている。そして、
美しい。すっかり現地の人たちのものになっている
その建物のなかの職員室には、すでにカムアン県
の教育長や郡の教育事務所の関係者、そして小学
校と中学校の先生方、ハドシェンジー村の代表など、
たくさんの人たちが集まっていた。

財団一行に対する歓迎の言葉を受けた後、浦上
理事長が挨拶を行った。「3年プロジェクトの今年
は最終年。初年度は週1回だったランチが2年目
は週3回に、そして今年は週5回実施されていると
聞き、大変嬉しく思っている。日本でも、第二
次世界大戦終戦後に導入された学校給食が子ども
たちの心身強化に大きく貢献した。この学校がモ
デルとなって、ラオス全土にこのプロジェクトが
広がっていくことを願っている」。

これに対し、まず、中学校の校長先生が口火を
切る。「生徒と先生、みんなが一緒になって取り
組んできた。これまではそれぞれ家に帰ってラン
チをしていたので家によって格差があった。学
校でのランチはみんな一緒にバランスよく身体に
良い内容となっている。さらに、学校登校率が上
がったし、以前はランチで家に帰ってそのまま
学校には



ランチプロジェクトは生徒の保護者や地域の人たちの協力で運営されている。学校の菜園で採れた野菜がどんどん切り揃えられていった。燃え盛る薪の上には大きな寸胴鍋。ひと口大にした魚を豪快に投入する。女性たちは楽しそうにおしゃべりしながら、でも、手が止まることはない。子どもたちは制服を着用していたり、裸足だったり。それでもどの子も目が澄んでいて可愛い。レンズを向けるとはにかみつポーズ。どこの国の子どもにも同じように未来があるのだ。加藤隆久氏建築の校舎は電気がなくても明るく風通しが良かった。ラオスの木材が美しい。





いよいよ給食の時間。順番に調理場まで今日のおかずをもらいに行く。子どもたちは自宅からおこわがいっぱい詰まった弁当カゴを持ってきて、手で丸めながらおかずのスープに漬けて食べる。手ぶらで登校してきた子にはあたりまえのように持っている子が分けてあげていた。それにしてもこの量で4人分。学年が上の子にはいかにも少なそうだ。食後には食器を洗うことと歯磨き。すっかり習慣になっている。



戻って来ない子どもがたくさんいたが、その心配もなくなった。学力的にも向上が見られる。また、村の人の協力が得られるようになり、新たなコミュニケーションが生まれた。ランチの材料は村の人が市場まで買いに行っていたが、少しずつ、自分たちの畑で賄ったり、余ったときは他の村に売ることもあるようになってきた。村に新たな力が付いてきたのだと思う。

一方、課題としては、料理をする女性同盟の人が人数的に減少しており、特に稲刈りの時期などは人出が足りなくて困っている。時には授業がない先生が調理に入ったり、生徒が手伝ったりしている。人の確保が一番大きな問題だ。

小学校の校長先生はいう。「中学校は4つの村が学区となっている。女性同盟で当番を決めているが、難しさがある。小学校はたとえばハドシェンジー村を20以上のユニットに分け、当番を決め、話し合いで担当者を決めている」。

党関係者の弁。「ランチプロジェクトはとてもいいこと。生徒の健康も学力も向上している。生徒のランチ代が浮くということで、家族にとってもありがたい話だ。村と先生方の力でなんとか維持していきたい。当番の減少の件はなんとか自分たちで解決していこうと思っている。村からの予算を捻出する計画もある。ただ、村全体は雨期になると洪水になったり、自然災害があるし、村人の経済もあまり良いとは言えない。少しずつ我々も努力をしていくので、援助についてすぐに停止するのではなく、ぜひ漸次撤退ということで考えて欲しい」。

日本の学校給食システム運営について参考意見も求められた。どうしたら支援を継続してもらえるかにかなり腐心しているように見え、継続的自立運営への道筋にはまだまだ困難があるように思えた。

さて、会議の後はパーシー儀礼の時間である。正式には「パーシー・スクワン」。身体の各部位に宿る32の魂(クワン)を呼び覚まし、それが身体から飛び出たり浮遊しないようにしっかりとつなぎとめておくための儀式で、ラオスでもっとも頻繁に行わ

れる重要な儀式であり、習慣だという。

会議前に準備されたパークワンと呼ばれる独特の飾りのまわりを囲んで参加者が集い、パークワンから延ばされた白い糸をそれぞれが持つ。糸が届かない人は糸を持った人の腕などに軽く手を添えて、居合わせた人がみなパークワンとつながりあうようにする。そして、村の祈祷師が呪文を唱えることから始まり、この日、主役として迎えられた浦上理事長の手首に白い糸が巻かれた。そのあとは、我も我もと理事長はじめゲスト、参加者の手首に白い糸を巻き結んでいく。「悪しきことが流れ去り、良きことのみがやってきますように」「無病息災で長生きできますように」「日本に帰ってもこの村のことを忘れないでいてくれますように」等々、さまざまな願い事を唱えながら結んでいく。みるみるうちに、手首には何十もの糸が巻かれた。糸は3日間ほどそのままにしておくものだという。ハサミを入れてはいけぬ。自然に自然に…。指先で少しずつ取っていくのは許されると聞いてホッとした。

パーシーが終了した後、校庭に出て調理場を見学した。調理場といっても、一応屋根はあるものの、壁はない。そこで、5～6人の女性が青々としたつまみ菜をザルに積み上げていた。傍らでは、食器を洗い用意する人が3人。何人かの生徒も野菜を洗うなどの手伝いをしている。薪を運んで来る子どももいる。

野菜の下準備が終わったら、50メートル離れたところにある水場で野菜の洗浄。ホースはそこからさらに70メートルほどの距離にある菜園内の井戸から引いていた。

中学校の調理場ものぞいてみた。すぐそばにある菜園には美しい緑をした葉もの野菜がきれいな列を作っている。

調理場では、魚と野菜のスープができあがりつつあった。きのこ以外は全部菜園で採れた野菜だと胸を張っている調理担当の女性。大きな鍋からは美味しそうな匂いが流れてくる。

ラオスの基本調味料は、魚を塩と糠で漬けた発酵調味料「パデーク」。「パ」は「魚」、「デーク」は「腐らせた」という意味だという。とはいえ、傍らには大きなうま味調味料のビニール袋があった。

今日の料理は魚と野菜のスープ。ずらっと並んだボウルに美味しそうなお湯が取り分けられる。小学校用にはひとつのボウルにスプーンが3本。これが3人分の食事なのかと驚く。日本の感覚では、せいぜいひとり分だろう。ご飯(もち米おこわ)を、東南アジア各国でよく見られる手提げカゴに入れて家から各自持ってくるので、大丈夫。「おかげで栄養バランスがしっかりとれますしね」と先生から説明を受けた。

子どもたちがボウルを受け取りにやってくる。受け取ったら、各自の教室へ。家から持参したご飯カゴを取り出して、食事が始まった。3人でひとつのボウルのスープを分けあって食べるのだが、なかにはご飯を持っていない子もいる。そんな子には持参してきた子が分けてあげていた。カゴのご飯を手で器用に丸めてスープにちょっとつけて食べる。「美味しい?」と聞いたら、キラキラとした眼で「美味しい!」と叫ぶ子、大きく頷く子。どこの国でも変わらない楽しい給食の時間である。

ランチメニューで一番人気は「ラオス風うどん」らしい。でも「魚のスープも美味しい!」「今日もそうだよ!」「野菜が3種類も入っている」「みんな食べるから楽しい!」。

どの子もはにかみながらまっすぐな視線を向けてくる。「数学が好き」、「歴史が好き」、「英語が好き」。小学校から英語を勉強しているのだ。EDFラオ所長のカムヒアンさん曰く「ASEANに加盟していますから、これから英語は必須です」。

食事が終わったら、校庭に大きな平バケツを並べて、使ったボウルの5段階洗浄。洗剤液につけて、その後、水洗いを4回。きれいになったら、調理場まで返しに行く。そして、歯磨き。ランチプロジェクトが始まって、歯磨きもすっかり習慣化した。小さな子どもたちも遊びの一種のように楽しんでいる。

一方、中学校は生徒が二人一組になって大きなボウルに入ったスープをクラスまで運んでいた。そして、クラスで先生が小分けしていく。なかには、先生が指導しつつ、生徒が取り分けていたクラスもあった。量は小学校とたいして変わらない。あれでお腹いっぱいになるのだろうか少し疑問に思った。

中学校の生徒ということはこの地域では恵まれた子どもたちなのだろう。この生徒たちのなかから、もしかしたら、将来、ラオスをリードする存在が誕生するかもしれない。

食事の後片付けが終わったら、午後2時の午後の授業再開まで昼休み。いったん家に帰る生徒が多いようだ。その間に、我々一行も先程パーシーが行われた部屋に戻り、ランチをいただいた。生徒と同じスープはもちろん、揚げ魚や青菜炒め等々、歓迎のための豪華な料理が並ぶ。生徒と同じように、カゴに入ったもち米おこわご飯も配られた。どの料理もクセがなく、美味だ。食事こそ贅沢の象徴、幸福の根源。村長はじめ村の重鎮たちも学校関係者も、居合わせたすべての人たちが一生懸命食べることを楽しんでいる。人は食事でのみ生きるエネルギーを得る。人を作るのも、人の明日を作るのも、食事であるということを改めて思う時間だった。

午後2時。再び登校して来た子どもたちは、農業実習の時間である。菜園にあるのは、レモングラス、ニンニク、空心菜、ネギ、香菜、フリルレタス、トマト、ナス、唐辛子、ディル、ミント等々。周囲にはバナナの木。キノコの栽培ハウスもあった。

その日の作業は、雑草や害虫の除去と水やり。テキパキと作業に取り組む子、友だちとおしゃべりしながらのんびりと草取りをしている子、おどけてみせる子、どこにでもある子どもたちの楽しそうな風景。

つまみ菜を植える予定のところの開墾作業も始まった。鍬で土をおこしていく。理事長以下、試してみたが、これがなかなか重労働。しかし、子どもたちにはそれも楽しい作業のひとつのようだった。

ラオスの伝統的歓迎行事「パーシー」。浦上理事長以下、一行も参加して厄除と幸運を祈ってもらい、終わりには村の伝統織布をいただいた。午後2時の農業実習の時間。学校内の菜園で雑草や害虫の除去作業と水やりを行う。菜園の周囲にはバナナの木。横にはキノコの栽培ハウスもあって、なかなかの充実ぶりがかがえた。



村のおばあさんが、おじさんが、
眼を光らせている。

2月11日(水) 今回の訪問先2校目のボンサイ小
学校へ向かう。

同じくカムアン県にあるボンサイ村は、218世帯、
人口1,504人の村。平均年収は日本円にして20,000
円に届かない。

昨日同様、子どもたちの歓迎の列のなか、学校
校舎へ進んでいく。昨日より裸足の子もがずい
ぶん多い。着ている服にも汚れが目立つ。手渡し
してくれる手づくりの花束も一層つましいものだっ
た。それでも、子どもたちの表情は好奇心にあふ
れていて、眼の輝きに胸が熱くなる。

昨日と同じように、歓迎の会が始まった。村の
代表の挨拶。「ランチプロジェクトは子どもたちにと
っても村の人間にとっても、とてもいいプロジェク
トだと思う。村の代表として心から感謝したい」。
学校長からは「村の人々も協力してくれて、プロジェ
クトは順調に進んでいる。去年までは水の問題が
あったが、村人と相談して池を掘ることにした。池
はすでにできあがったが、水はまだ貯まっていな
い。今のところ、他には問題はない。これから
我々は努力を続けていくが、もっとよくしていくた
めになにかアイデアがあればぜひ聞かせてほしい」。
真摯な眼差しから発せられる切実な求め。
そこにいる誰もがランチプロジェクトを自らの課題
として考えていることを実感する。

ここで浦上理事長が菜園の収穫について質問し
た。それに対して、「今年は気温が低かったので、
野菜はあまり収穫できていない。仕方なく外で買っ
てくることも多い状況だ。魚は水が少ないのでま
だ穫ったことがないが、もう少し成長したら獲れる
と思う。鶏は17羽いる。学校がお休みのときは、
先生たちが家に持ち帰って育てている。それを合
わせると、全部で35羽。3ヶ月くらい経ったら売る
予定でいる」。理事長が、ランチプロジェクトのモデ
ル校になって欲しい。そうできるだろうか?と問う
と、「できます!」と即座に力強い答えが帰ってきた。

それにしても、水の問題はかなり深刻なようだ。
ここ4ヶ月、雨は一度も降っていないという。「水の
問題は学校だけのことではなく、村の問題でもあ
る。もっと深く広く池を掘るつもりだが、25メー
トル以上掘ると塩水になってしまう。各家庭でそれ
ぞれが少し掘ってなんとかその家に必要な水量は
確保できるかという状態。今は家庭から水をもらっ
て調理用にまわし、飲料用水は購入している」。学
校から少し離れたところにも新しく池を造った。
道路造成のための採土によってできた池だとい
う。ランチのための魚の養殖池として利用する計画
らしい。この池がしっかり活用できるようになったら、
問題は少しは軽減するのだろうか。

訪問時は乾季の終盤。雨季になる6月まで、まだ
しばらく水不足は続くだろう。しかし、そう語る表情
には諦めない強さが見えた。自分たちで助け合っ
てなんとかしのいでいく。はるか昔からこの土地の人
はそのようにして生きてきたのだから。地域の絆が
心の強さとなって、明日への力を生んでいる。

その後のパーシーも昨日と比較するとずいぶん
質素だった。儀式的の中心に置かれたパークワンも
小さく、簡素。それでも、祈りの言葉、願いを唱え
る声や表情は真剣そのもので、却ってそのことに
心が打たれた。

校庭の片隅にある調理場を見学した。壁もなけ
れば、床もない。柱と屋根で囲ってあるなかに、
薪を燃やす竈が組んである。板に脚を付けただ
けの調理台で魚の下処理をし、野菜を切っている。
村の女性4人。なかに高齢の小柄な女性がいた。
痩せた身体に皺だらけの顔。強い視線。調理に
あたる女性たちにテキパキと指示を送っている。
毎日、学校に来て手伝いをしてくれるのだという。
時に監督官、時に指導員、時には生徒や先生の相
談相手になっているのかもしれない。一見、厳しく
思える視線だが、芯の優しさがあふれている。

もうひとり、40代の男性が女性たちに混じって
作業していた。交替でリーダーを務めているとい
う。こちらは先生のような雰囲気。子どもたちが



2校目のボンサイ小学校にて。昨日同様、全校生徒の歓迎を受ける。
しかし、ここは昨日のハドシエンジー小・中学校に比べて一段と貧しい。
靴を履いていない子が何人もいた。服装にも汚れが目立つが、逆に、
目の輝きと礼儀正しさは比較にならないほど素晴らしかった。



ランチプロジェクトはもちろん、
子どもたちの学校生活全般に目
を光らせている高齢の女性が
いた。先生以上にさまざまなこと
を教え、叱り、導いている。この人
の存在がもたらすものは限りなく
大きい。



高齢の女性の他に、この男性の存在も鍵となっていた。調理場に立って、おかずを受け取りに来る子どもたちにきちんと順番を守らせ、感謝の言葉を言わせてからボウルを渡す。子どもたちも素直に従っている。ランチプロジェクトはエネルギーを補給し、栄養バランスを向上させるのみならず、いただくことへの感謝を覚えさせ、仲間と分け合うことを教え、食べることの意味を身体に沁み込ませる力を持っているようだ。



できあがった食事を受け取りに来たときも、ちゃんと列を作って順番を守るように、受け取る時には「ありがとう」とラオス式の感謝を表すように、とマナーも同時に教え、しっかり守らせていた。子どもは家庭の宝であり、地域の宝。自分たちの未来を地域で守り、きちんと育てていこうという意志がここには確かにある。ランチプロジェクトの成否を問う以前に、物質ではない豊かさを実感する経験だった。

校庭には古い校舎もまだ残っていた。木造の建物だが、バラック同然。しかし、そこもまだ教室である。以前はすべてがこのような状態だったのだろう。民際センターが加藤さんの設計でラオスを活かしたラオスらしい校舎を建築し、ようやく学校らしいかたちができあがった。そして、今、ランチが村人の協力でどうにか根付きそうになっている。

子どもたちのランチ風景は、昨日のハドシェンジー小・中学校でも、このボンサイ小学校でも、日本でもどの国でも変わらない。楽しそうに、美味しそうに食べている。子どもたちはキラキラした眼で見学者である我々一行を見、我々の質問にほとんどの子が恥ずかしそうに頷いたり答えたりしている。ここでも、もちろん、食後の食器洗いと歯磨きはしっかり実行されていた。

さて、私たちのために用意されたランチは、チキンスープ、魚の唐揚げ、パパイヤサラダ等々。さきほどの調理場でできあがったばかりの料理はどれも美味だった。ラオス料理は本当にクセがなく、日本人にとってもなじみやすい。もち米おこわご飯とのバランスもなかなかである。満足して、我々も少しのあいだ、昼休みをすごした。

学校内の池を見せてもらった。縦10メートル×横7メートル×深さ5メートル。水はほとんどない。水を浄化する装置もあるが、肝心の水がないことには役に立たない。1年の半分以上が乾季・暑季というラオス。これは切実なこの村の問題であり、ラオスの水源から遠い地方全体に関わる問題である。

国と郡と村が一体となって取り組み、そのなかで最新の機械や技術の導入を少しずつはかりながら進歩していくしかないのだろう。しかし、村人の人生は今日も明日も続いている。そして、子どもたちの時間は待つてはくれない。

午後は、池のそばにある菜園で雑草取りと水やり。畑の土は乾燥してひび割れている。それでも、野菜や植物の生命は力強く新芽を出し、緑の色を濃くしている。せせせと井戸から水を運び畑へまく子どもたち。日本だったら就学前のような身丈の子どもも自分の体重の半分もありそうなバケツをヨロヨロしながら運んでいた。真剣な表情、そして素直な笑顔、笑顔にこちらまで嬉しくなってくる。

これで視察スケジュールもすべて終了である。帰り支度を始めた途端、校庭に大勢の人が集まってきた。先生方、まだ学校に残っていた生徒たち、調理場にいた女性、あのおばあさん（…もしかしたら、それほどの年齢ではないのかもしれない…）、村の人たち、そしておしゃれをした若い女性たち。この女性たちはボンサイ小学校の卒業生なのだという。たくさんの人たちが我々を取り囲んできた。おばあさんがギュッと抱きしめて、「悪いことが起こりませんように、いいことがありますように」と呪文を唱えてくれた。

ボンサイ小学校は、慢性的に水は不足しているが、村全体で一体となった意志がある。困難はきっとなんとか乗り越えていこう。この地を選んで、この学校にランチプロジェクトを導入したことが心から誇らしく思えた。

「支援する」ということ。
対象を認め、手を添え、助ける…。

ふたつの学校のランチプロジェクト状況を実際に目にして、改めて「支援」とはなにかを再考した。そもそも支援とは永遠を前提にしていない。限定された期間内にいかに目的成就のためのサポー

トができるか。つまりは自立のための一歩、そのために背中を押すということ。主体は終始相手方なのだから、こちらのペースや都合通りにはいくことは稀と考えるべきだろう。つつい、もっとこうしたら…とか、どうしてこうしないのか…と口出しをしたくなるが、ぐっと我慢して見守ることも必要だ。支援ということの意義と難しさを痛感する今回の視察でもあった。

なかで、同行したEDFラオのカムヒアン所長の語った言葉がひととき印象的だった。曰く、「プロジェクトを進めるにあたって、自分は3つのことをポリシーとしている。ひとつ目は『プロテクト』。ふたつ目は『バランス』、そして3つ目が『プロモーション』。村には村の考え方があり、それを尊重しながら、こちらの目標をいかにバランスよく理解させ浸透させ、広めていくか。この順番を守って、村人との関係をどう築いていくかを第一に考えていかなければいけないと強く認識している」。

「プロテクト」「バランス」「プロモーション」。略してPBP。これは国外の活動だからということではなく、すべからず支援活動、NGO/NPOに携わるものに根本的に求められる姿勢なのかもしれない。

「ラオス・浦上ランチプロジェクト」はまだ始まったばかりである。「ランチ」といっても、浦上食品・食文化振興財団が取り組むのは「学校給食」に他ならない。「給食」「KYUSHOKU」。日々の食事すら満足でない状況のなか、弁当を持たせての登校は難しい家庭も少なくない。学校での給食は子どもたちの栄養不良を改善し、親たちに食事のために子どもたちを学校に行かせたいと意識させることにもつながる。ポンサイ小学校の成功の第一歩がラオス全土に拡がって、少しでも子どもたちの体力向上や学力向上に寄与することができれば、財団にとって初の国際活動支援プロジェクトも着実な一歩を築いたと自負しても許されるのではないだろうか。

一方、ハドシェンジー小・中学校は、ひとつの村で成立しているポンサイ小学校とは違い、4つの村

から生徒が集まっているが故の難しさに足踏み状態からなかなか脱することができていない。大きな成功を得るためには、小さな成功を積み上げていくことが肝心である。今後は、学校選定段階での検討により時間をかける必要があるかもしれない。ポンサイ小学校のあのおばあさんと男性リーダーを思い出しながら、結局、プロジェクトの成否は人に因る、人に尽きると、当たり前結論をなぞる一行だった。



パーシー後には歓迎の食事が開かれた。子どもたちと同じように、ひとりずつおこわ入りのカゴが配られた。魚の唐揚げと具沢山のスープ。青菜の炒めものもある。村人にとって、これほど贅沢な食卓はそう頻繁にはないだろう。どれもこれも、とても美味だった。



以前の校舎もまだ使われていた。壁の板はすでにほろほろになっている。床は校庭と同じ、砂のまま。雨期にはどうなってしまうのだろう。しかし、子どもたちは屈託がない。元気いっぱい、いたずら好き。子どもの笑い声は世界共通。未来があふれている。

2014年度(3年目)ラオス・浦上ランチプロジェクト 完了報告書

委託団体:公益財団法人 浦上食品・食文化振興財団
受託団体:公益財団法人 民際センター

1. 2014年度実施概要

2012年度からスタートした「ランチプロジェクト」は2014年度をもって3年目を終了した。この3年間、カムアン県の3校(ポンサイ小学校、ハドシェンジー小学校・中学校)で全校生徒を対象に第1年目:週1回、第2年目:週3回、第3年目:週5回の給食を実施した。3年間にこれら3校で1,793名の生徒と84名の先生に164,676食を提供したことになる。3年目だけをとりあげると、88,920食、613名(先生を含む)であった。同事業は給食の実施だけではなく、昼食の食材および現金収入を得るための農作業と衛生意識を高めるための歯磨きと手洗いも実施した。3年間の農産物の販売収入は25,464,000キップ(391,753円)で、食材に使った農産物は11,757,000キップ(180,879円)であった。

2015年は国連ミレニアム開発目標(MDGs)の最終年である。8つの目標のうち1番目に「極度の貧困と飢餓の撲滅」が掲げられている。さらに細分化された目標で

ある「極度の飢餓の半減」について国連の発表では、開発途上国の栄養不良の割合が1990~1992の24%から2011~2013の14%まで減少し、「2015年度末までに目標達成が可能」と報告されている。

東南アジアの最貧国のひとつ、ラオスで生活する児童の栄養状況はどうか。ユニセフ発行の「世界子供白書2015」では、5歳未満児童のうち低体重児は27%となっている。栄養状況が「極度の飢餓」といった言葉で形容されるほど深刻ではないが、栄養が足りない児童は4人にひとりの割合となっている。浦上ランチプロジェクトが実施されているカムアン県の中学就学率は、ラオスの全国平均のそれをやや下回っており(2011年度)、栄養の足りない児童の割合はもう少し多いのではないだろうか。

以下、ランチプロジェクトの2014年度の事業報告であるが、同事業実施3年間の各年度の数値も併記して、3年間の進捗状況も振り返る。

【2014年度の行動スケジュール】

1. 7~8月	●記録帳や出納帳などの準備
2. 9月	●資金の送金、事業スタート
3. 10月	●農業活動のための土地の準備、モニタリング&収支のチェック
4. 11月	●テレビ撮影の準備
5. 12月	●モニタリング、収支のチェック
6. 1月	●資金の送金
7. 3月	●事業評価、テレビ撮影&編集
8. 5月	●事業報告作成のための調査
9. 6月	●事業報告、収支報告作成



2. 事業内容

●昼食

以下の通り、3校で給食を食べた生徒は3年間で1,793名、先生84名に上った。このうち、昼食を持って来ることができない子どもは(昼食を持って来ることができる子ども)栄養のある昼食を食べる事で健康を維持・増進できた。それが学校に通い続ける一因になったと思われる。加えて、経済状況(食糧事情)の厳しい家庭では食費が節約できた。その分、他の家族メンバーの食事の改善につながった家庭もあったかと思われる。

ランチの食材については、鶏肉や魚は主として市場や村で購入し、野菜に関しては主に菜園で育てたものを使った。メニューについては教師と料理を作る村人が相談し、生徒の好みを聞き、価格の安い旬のものや学校で生産される野菜を中心に考えた。生徒の好みについては、小学生はもち米に合うおかず(魚、鶏、豚のスープ)、中学生はうどんが人気メニューとなっている。

【3校の人数(生徒・先生)と給食の提供セット数】

	ポンサイ小学校	ハドシェンジー小学校	ハドシェンジー中学校	合計
2012年度 (ランチ:週1回)	生徒224名/先生6名 7,617セット	生徒161名/先生6名 5,474セット	生徒225名/先生16名 7,650セット	●人数(生徒・先生)● 生徒1,793名 先生84名
2013年度 (ランチ:週3回)	生徒205名/先生6名 18,860セット	生徒170名/先生6名 15,640セット	生徒223名/先生16名 20,515セット	●給食の提供セット数● 164,676セット
2014年度 (ランチ:週5回)	生徒188名/先生6名 28,576セット	生徒180名/先生6名 27,360セット	生徒217名/先生16名 32,984セット	



● 体重の変化

以下3年間のランチ実施3校の身長・体重の推移から、ランチを実施した3年間で6～11歳の小学生の身長は順調に伸びていることがわかる。例えば、2012年度8歳児(黄色地)は111cm→124cm→131cmとなっている。一方、体重の増加は身長に比べると鈍い。例えば、

同8歳児は22kg→23kg→27kgで、増加はわずかである。2012年度はランチが週1回だったことと、ボンサイ小学校で約3分の1の生徒がマラリアに罹ったことが体重の鈍い伸びに関係しているかもしれない。

【身長と体重の変化】

	2012年度		2013年度		2014年度	
	身長(cm)	体重(kg)	身長(cm)	体重(kg)	身長(cm)	体重(kg)
6歳	101	20	108	17	107	17
7歳	95	20	114	19	115	20
8歳	111	22	122	22	119	21
9歳	120	26	124	23	125	24
10歳	130	29	130	27	131	27
11歳	129	29	131	28	135	30
12歳	130	29	139	32	136	33
13歳	135	32	145	39	142	36
14歳	141	36	152	43	145	39
15歳	149	47	153	48	151	42
16歳	153	50	157	48	150	46

● 病気

一般に食事が貧しく衛生環境も整っていないラオスでは、子どもは病気にかかりやすい。以前、保健衛生事業で健康診断を実施した際、子どもたちは風邪、発熱、扁桃炎、頭痛、肺炎、喉の痛みなど、いくつもの症状が見られた(それに対して、学校にも家庭にも常備薬がなかった)。それに比べると、ランチ実施3校の罹病

率は低い。ランチの提供が罹病率にどの程度影響を与えているかはわからないが、2014年度にかかった病気は風邪だけで、しかも3校とも罹病率が1割以下だったことは、ランチ提供週5回の効果が表れてきたといえるかもしれない。

【病気にかかった生徒数】

	ボンサイ小学校	ハドシエンジー小学校	ハドシエンジー中学校
2010年度	229名のうち50名が病気にかかった	130名のうち8名が病気にかかった	216名のうち48名が病気にかかった
2012年度	マラリアやデング熱が流行り224名のうち74名が病気にかかった	病気にかかった生徒0名	225名のうち7名が病気にかかった
2013年度	205名のうち45名が風邪を引いた	170名のうち24名が風邪を引いた	223名のうち16名が病気にかかった
2014年度	188名のうち15名が風邪を引いた	180名のうち8名が風邪を引いた	217名のうち6名が病気にかかった

※2012年度中にボンサイ小学校でマラリアやデング熱が流行り、多くの生徒が病院で治療を受けた。ラオス事務局に確認したところ、マラリアの場合、病院で治療を受けると700,000キップ(1万円以上)かかるそうだが、親はそのお金を支払ったとのことだった。

● 退学率

ラオスでは、タイに出稼ぎに行く親に付いて行くために学校をやめてしまう子どもが珍しくない。子どもは学校をやめたくないと思っても、他に誰も面倒を見る人がいない場合、子どもは学校をやめて親について村を出て行かざるを得ない。タイの国境に近いほど出稼ぎ

に行きやすい(ラオス国内よりタイの方が稼げる機会が多い)ので、その傾向が強いと思われる。こうした傾向の中で、ランチ実施3校はタイ国境に近いにもかかわらず、退学率は比較的低いと思われる。特に2014年度は3校で1名のみであった。

【3校の退学者数とその理由】

	ボンサイ小学校	ハドシエンジー小学校	ハドシエンジー中学校
2012年度	2名 [親の仕事の都合]	1名 [母親が死亡(2013年度に復学)]	6名 [親の仕事の都合]
2013年度	1名 [親の仕事(タイへ出稼ぎ)の都合]	3名 [親の仕事(タイへ出稼ぎ)のため]	2名 [親の仕事(タイへ出稼ぎ)の都合]
2014年度	1名 [他の地域に引越したため]	0名	0名

● 全学年の期末試験の合格率

ラオスの小・中学校ではすべての学年で年度末の期末試験が行われ、義務教育にもかかわらず、点数によっては落第もある(1回目のテストで合格点に達しない生徒のために、補習授業→再テストを行う学校が多いようである)。さて、ランチ実施3校の生徒は、週5回のランチで十分な食事ができ、お腹がすいて勉強に身が入

らない生徒はいなくなったはずである。その成果かどうか因果関係は正確にはわからないが、ランチを実施する前と比べて、実施3年後でボンサイ小学校の期末試験合格率は4.75%アップし、ハドシエンジー小学校は2.77%上昇して100%になり、同中学校は3年間100%を維持している。

【期末試験合格率】

	ボンサイ小学校	ハドシエンジー小学校	ハドシエンジー中学校
2010年度	88.10%	97.23%	100%
2012年度	87.00%	99.00%	100%
2013年度	90.35%	100%	100%
2014年度	92.85%	100%	100%

●手洗い

奥地の、電気もまだ通っていない村では、病気が病原菌によるものではなく悪い精霊の仕業とされていて、いまだに病気にかかったら呪術師を呼ぶ村すらある。ランチ実施3校は比較的開かれた地域にあり、病気やけがをした場合、病院に行ったり、薬を購入したりする。しかし、予防の意味をしっかりと理解していないため、食事前に手を洗う習慣が必ずしもきちんと確立していなかった。学校でその説明とデモンストレーションを行うことで、生徒だけではなく親にも予防の意識が高まり、手洗いの習慣が普及してきた。

【「食事の前に手を洗いますか?」】

		はい	ときどき	いいえ
2012年度	生徒 30名	30名	0名	0名
	両親 25名	25名	0名	0名
2013年度	生徒 30名	30名	0名	0名
	両親 15名	15名	0名	0名
2014年度	生徒 30名	30名	0名	0名
	両親 15名	15名	0名	0名

●歯磨き

事業開始前は朝だけ歯を磨いていたが、事業開始以降、どの学校の生徒も朝と夜(就寝前)に歯磨きをする習慣が根づいている。ポンサイ小学校とハドシェンジー小学校の生徒の中には、学校でのランチの後に歯を磨く生徒もいる。この事業で、歯を磨かないと虫歯になったり、口臭が出たりすることを理解したからである。生徒の歯磨き習慣が親にも影響を与え、インタビューをした親55名は全員、起床後と就寝前に歯を磨いている。

【「朝晩、歯を磨きますか?」】

		はい	ときどき	いいえ
2012年度	生徒 30名	30名	0名	0名
	両親 25名	25名	0名	0名
2013年度	生徒 30名	30名	0名	0名
	両親 15名	15名	0名	0名
2014年度	生徒 30名	30名	0名	0名
	両親 15名	15名	0名	0名



3. まとめと成果

- ① 2010年度には106名が病気にかかったが、2014年度は29名(全体の5%)で、しかも風邪だけなので、罹病率は減少しているといえる。そのことと週5回のランチの提供および手洗い・歯磨きとの具体的な関連性はわからないが、結果からよい影響を与えていることは間違いないと思われる。
- ② 3校の生徒の身長伸びは順調だが、それに比べれば体重の伸びが鈍い。週5回のランチを継続すれば体重の増加幅ももっと大きくなると期待したい。
- ③ この事業により、家庭の食費が削減でき、貧困家庭は経済的に助かっている。また、生徒はチームで協力して仕事をし、皆でランチの準備をし、グループで食べ、片づけをしている。こうした過程で「協力して行動する」経験を積み重ねている。

4. 問題点と改善策

- ① 収穫期(農繁期)に調理ボランティア(お母さんたち)を集めるのはひと苦勞である。特にハドシェンジー中学校では調理ボランティアが来ない日もある。その場合、授業中にもかかわらず、先生と生徒が協力して料理を作る。円滑な事業運営にはリーダーの存在が必要で、リーダーを育てるには村人の協力が欠かせない。この3年間、ハドシェンジー中学校のランチ事業に対して村人から十分な協力を得られなかった。リーダーを育てるためにも、まず4年目はその原因究明を行う必要がある。
- ② 調理にも農作業にも、また保健衛生活動にも水の十分な供給が必要である。水不足が激しいポンサイ小学校では池を造ったが、それでも水不足が見られる。特に今年の雨季に雨が降らず、結果、2014年度の農作物の生産が減少した。また、農作物の収穫を増やすため、土を耕す予定だった池の周囲で不発弾が見つかった。不発弾の調査をする必要があるかもしれない。その場合、農作物の増産はすぐには難しい(ラオスでもタイ東北地方でも、灌漑のない村での水の十分な供給は難しく、それが貧困の原因となっている。今のところ雨頼みで、適切な改善策がない)。

- ④ メニューの記録、農業生産物の販売の記録、支出、毎月の体重の増減などの記録をとることが根づいてきた。記録のとり方についてEDFラオ(ラオス)事務局が先生・生徒に指導しているが、どの学校でも進歩が見られ、習慣として定着しつつある。
- ⑤ 3校の生徒はグループやクラス単位で収入と支出の記録をとり、収入と支出を理解しながら事業を運営する姿勢を見につけはじめている。こうした理解も手伝って、ハドシェンジー小・中学校の生徒の中には、先生が農産物を販売する活動を助けた生徒もいる。
- ⑥ 生徒は昼食後の後片付けがしっかりできるようになった。調理場も食器もきれいに保たれている。

- ③ 農業の生産性を上げるためには専門的な知識、技術、経験が必要であるが、専門家を見つけることが容易ではない。ビエンチャンにあるInstitution of Agriculture Development and Service of Houyson-Houyxouaは農業専門家を派遣する機関で、以前に問い合わせたが費用が高すぎて手が出なかった。3校に貯まっている資金で専門家を派遣できないかどうか検討し、4年目に再交渉したい。同時に近隣の村で腕の良い農家を探し、協力を得るように努力したい。
- ④ 小学校と中学校で提供するランチの量は同じである。中学生と小学生では食べる量が違うので、中学生にとって量が十分ではないことがある。EDFラオ(ラオス)事務所はこの点について中学生は量を増やすべきではないかと認識をしているので、逐次、改善を加えていきたい。
- ⑤ 実施3年後の財政的独立については、現状では難しい。これまでの実績から、1年間事業を運営するには45,000,000キップ(60~70万円)が必要だが、その金額を独力で捻出するのは難しい。ポンサイ小学校でもハドシェンジー小・中学校でも農地を広げて増産を検討しているが、実現は容易ではないようだ。ハドシェンジー村ではリーダーが見つかるかどうかにかかっている。

「食」をいただくことは、「命」をいただくこと。

「食」はすべての礎であり、「未来」の基点である。

だから、「食」をもっと考えていきたい。「食」でもっと支えていきたい。



公益財団法人浦上食品・食文化振興財団は、
40周年に向けて、新たな活動を始めます。

U r a k a m i F o u n d a t i o n